
化怪-BA . KE-

織姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化怪 - B A ・ K E -

【Nコード】

N 3 4 6 1 T

【作者名】

織姫

【あらすじ】

交通事故によって突然命を奪われてしまった少女楠詩季美^{くすのきしきみ}。気がつく^きと彼女はこの世へのある思いから、成仏できずに幽霊となっていた。

一方、大学生の機殿真実^{はたぢのまこと}には幼い頃から常人には見えないもの「妖怪を見ることが出来る特別な能力があった。ある日、真実は部屋の中に不気味な気配を感じる。その気配の正体は、幽霊となった詩季美であった…」。

私の名前は楠詩季美^{くすのきしきみ}。

享年21歳弱のとっても可愛い女子大生（どこの大学かは教えてやらん）。

趣味は空手と食べることに、そしてM男をイジること…だった。

「以下、しばらくは詩季美の回想（独り言）」

私は死んだ。

交通事故で突然命を失ったのだ。

今でも覚えている。

太陽が全てを溶かしてしまいそうなほどの暑さだったあの8月3日の正午頃、私は自分の通学経路の途中にある人通りの比較的少ない交差点を渡っていた。

夏休み中ではあったが、ある用事があったて私は学校に向かっていた。そこに自動車側の信号が赤にも関わらず高速で突っ込んでくる車（車種は車に疎いのでわからない）に私は気付かなかった。

今日は学校にM男が2人来るが、さてどっちをイジってやるのか…なんてくだらないことを考えながら歩いていて注意力が散漫だった私も私だが、信号無視のヤローに突っ込まれて死ぬなど、これほど悔しくて許せないことがあるだろうか。

「今でも覚えている」という表現を使ったが、死んだのに記憶なんぞあるものか、と思った読者が大半であろう。

しかしあの時死んだはずの私にはしっかりとした意識があり、確か

に「覚えてい」ただ。
不思議な体験であった。

車に轢かれたショックから目が覚めると、自分の足元に血まみれの女子大生が痛々しい姿で倒れているのである。

しかも着ている制服のスカートが派手にめくれているというなんとも情けない格好で。

これから来る警察どもに披露するつもりであろうか。

その前になんで大学生が制服なんて着てるんだと抗議&賛辞が飛び交うことだろうが、何のことはない。

これは11月に学校で行われる文化祭の衣装である。

今日はそのため打ち合わせを行う日で、どうせなら衣装を着て行ってやるうと思ったのである。

…って、そんなことはどうでもいい。

とにかく制服を着たとしても可愛い女の子が倒れていたのである。

その体から流れ出た赤い水はすでに乾き始めており、そのまわりには割れたフロントガラスの破片が散乱していた。

事故を起こした車は私を轢いたときの猛スピードのまま逃げたのか、現場にその姿はない。

私は自分が殺されてしまったことに対する悲しみや怒りも忘れ、自分の屍が目の前にあるという異様な光景をただ見つめていた。

私はどうやら『幽霊』といわれるものになってしまったようだ、とあの時はそう思った。

そう思わざるを得なかった。

血まみれの女の子を見ている女の子は確かに、まるでシャボン玉のようにふわふわと浮かんでいたのだから。

『幽霊』というと、ふつう死んだ人間の霊のことをさすだろう。

絵に描くと、死装束を着て足が無くて、ヒュウウドロドロドロ…っつーアレだ。

足が無いという幽霊が出てきたのは比較的後の方の時代になってからで、昔は死霊といって生前の姿のまま現れるものだった、というのを何かの本で読んだことがある。

日本には「靈魂信仰」というものがあって、動物とか植物、鉱物などありとあらゆるものに靈魂が存在すると信じられていた。

もちろん人間の中にもそれはあり、たとえ死んで肉体が滅びたとしても、靈魂だけは不滅であるという。

その靈魂が無事に昇天すればよいが、ある強い思いがあつて現世にとどまるといふことがある。

それが『幽霊』である。

私にあつた現世に対する強い思いとは何だろう。

思い残したことがあるとすれば、本気で人を好きになつたことがなかつた、ということかな。

男の子と接するのは好きだったし、楽しかった。

でもそれは恋愛ではない。

恋愛ってなんだろう。

人を愛するってなんだろう。

私はそれを知ることなく死んでしまった。

そのことが多分…私を現世にとどまらせたんだと思う。

…はい、回想（独り言）終わり。

ん？

何よ…そうよ。

幽霊はヒマなのよ。

私はね、殺した奴に復讐するとか、通行人を襲つて幽霊仲間にするとか、そういう楽しくも嬉しくもないことをする幽霊じゃないの！

他にもつと…することがあるでしょ…！！

「そのすることってのが、独り言なのかい？ハニー」

「う」

「まあ、その考え方にはボクも大賛成なんだけどね、ハニー。復讐なんてものは愚行さ。殺した相手にも同じ思いを味わわせるとか、報いを受けさせるとかもっともらしいことって、結局は相手と同じ行為を自分もするだけ。そんなことをしたところで、何も変わらないのね、ハニー」

菅原道真すがわらのみちまねが崇り神となって災いをもたらしたとか、早良親王さわらしんのうの呪いで都が荒れ果てたとか、幽霊・怨霊の類はみんな理性も何もなく暴れまわる恐ろしい存在だ、なんて考えないでほしい。生きている人間と同様に、激しいのもしあれば穏やかなヤツもいるのだ。

無論私は後者である。

「それはさておき、今日はいつにも増して綺麗だねー、ハニー」

…せつかくいい話が続いて激しく同感してたのに、またいつもの鬱陶しいヤツに戻りおった。

というか、イチイチ「ハニー」って。

今こんなふうになの子呼ぶヤツって、どれくらいいるんだろうか。

このハニハニ野郎は私と同じ幽霊、いや、私とはまた全然ちがうタイプの幽霊（こんなやつと一緒にされてたまるか）の、なかきはらきくお榊原菊雄かいうヤツだ。

初めて会ったのは2ヶ月前で、それからほぼ毎日つけまわされている。

享年25歳らしい。

命を落とした理由は、脇見運転の車に突っ込まれて即死…つまり交通事故だ。

…あれ、交通事故死って、私と同じか。今頃気付いた。

共通点を見つけてしまった、がびーん。

「毎日毎日しつこいのよ。このストーカー！」

「失敬な！僕は君に毎日会いに来ているだけで後を付けてなどない！犯罪者扱いしないでくれよ、ハニ―」

あー、この「ハニ―」を聞くと理性が吹っ飛びそうになってしまう。あら、いけない。

理性を失ってしまつたら世の人間に怨霊とか呼ばれてしまうわ。おほほほ、ごめんあそばせ。

「ところで、今日という今日はボクと優雅に空中散歩してくれるよねえ、ハニ―」

…しません。(おしとやかに)

「(ピー)という喫茶店でお茶というのはどうかな」

…行かねえって。

「うーん、それじゃあねえ…」

ホントにコイツは…何でこの世に留まってるんだ。
全くわからん。

聞きゃいいことだが、マジメな返事が返ってこなさそうなので聞いてない。

怨念を残すタイプじゃないし、思い入れのある場所があるようにも思えないし。

ただひとつわかってるのは、私より幽霊歴が長いということだ。
死んでからもう5年になるという。

5年…考えてみれば大したことねーか、ははは。

「何をひとりでぶつぶつ言ってるんだいハニー、ボクの話聞いてくれよう」

「ちゃんと聞いているよ。そうねー…私、人間の恋人が欲しいナーと思ってるの。あ、だからってイケメンにとり憑いて来てもダメだからね。ちゃーんとした人間じゃなきゃダメなの。どおおーしても私と付き合いたいというのなら、生き返るしかないわね」

「そんな無茶な…」

「ならこの娘でも口説きなさいな」

「妖怪指名手配」
化怪猫の御玉はげねこ おたま

(詳細)

化怪猫とは、長い歳月を経て化ける能力を得た猫の妖怪である。特に「御玉猫」というやつは好んで若い女性の姿に化け、アホな男を誘惑して財産を掠め取った後にとり殺して始末するといいい、かなり性質たちが悪い(騙されるアホも悪い)。

つい最近、御玉猫がこの付近に出没したとの通報があったものの、未だ行方は知れない。

ちなみにその時はこんな娘に化けていたそうである。(まさかまた同じ顔の娘の姿で現れるとも思えないが)

とりあえずこの顔にピイーンと来たら、こちらまで連絡を)

- x x)

それなりのお礼はする予定ではいる。

あくまで予定。

「これ指名手配犯じゃないのサ…。いくら…この写真の顔が美人でも…無理です」

「それにしても何なのよこのいいかげんな指名手配は。どっから得た情報をもとに捜してんのやら。」

化け猫は人間に化けるだけじゃなくて人間に憑依することだってできるのに」

「この娘が普通の人間で、とり憑かれてるだけって可能性もあるのにねえ。とりあえずって、」

探す気があるのかねー、ハニー」

このストーカーとは同じ意見を持ちたくないのだが、これには同感だ。

残念ながら同感だ。

何人かの人間が通り過ぎていくが、この指名手配には目もくれない。恐らく普通の人間には見えないのだ。

見えていたら指差して何じやこりや傑作だーと爆笑するか、こんなバカなもの貼りやがってと剥がすか、あるいは写真の美人に鼻の下を伸ばすか、何らかのリアクションは取るはずである。

妖怪にしか見えない「妖怪の指名手配」なのだ。

そしてそんな指名手配を作れるのは…妖怪しかいない。

3 .

「はあ、またか」

そう言っただけは庭に置いてあるベンチに置きっぱなしにしていた薄手の上着にくつついてある青白いものを見つめていた。

「確かこれは…放置しておけば自然に消えるはずだ」

ぼそつとつぶやいて、花壇に植えてある向日葵に目をやる。

彼らは午後7時を過ぎた薄暗い庭の片隅で、太陽が去ってしまったことを悲しむかのようにうつむいていた。

10分ぐらい経ってから上着を見ると、さっきたくさんくつつ

いていたあの不気味なものはきれいさっぱり消えていた。

昔これを見た時はとにかくあわてて振り払ったもんだ。

これは『みのび蓑火』または「蓑虫」と呼ばれる怪異で、蓑にたくさんの青白い火がくつつく、というものである。

火のように見えるのに触っても熱くなく、消そうと思って振り払えば払うほど増えていく。

10年くらい前にも洗濯物として干されていた僕の上着にこの火がついたことがあって、振り払ったら消えるどころかさらに広がってかなりビビった。

やはり触っても熱くなかったので、家族にばれないようにクローゼットの奥に隠しておいたら、知らない間に消えていた。

まあ、こういう怪異ってやつは普通の人である僕以外の家族には見えないんだけどね。

あの頃は怪異が見えない振りをすることに慣れてなくて、まるで割つちまつた花瓶を隠すようにあわてて隠したもんだな…。

おっと、昔の思い出に浸っていて申し遅れた。

僕の名前ははたごのまこと機殿真実。

絶対に真実まみとは読まないでもらいたい。

趣味は読書と絵を描くことという、とつても文化的な大学3年生である。

勉強や資格取得に励むとか、残念ながらそういう学生ではない。

かといってサークル活動やアルバイトを頑張っているわけでもない。

それでも一応、性格的には「真面目」の部類に入るんじゃないかなーと、自負している。

うん、それだけである。

ただ普通の人間と明らかに違っている点は、怪異に度々遭遇し、それが存在する「もの」として目に見えてしまう、ということところか。

今日もまた『蓑火』に遭ったしな。

自慢じゃないが、他にも遭遇した怪異はたーくさんあるぞ。

道を歩いてしていると突然布みたいなのが目の前に広がってきて道
ふさぐ『野衾』のぶすまとか、光る玉が飛んできて福を与えてくれる『金霊』かねたま
とかね。

いやー、あの玉が来てからしばらくは金回りが良くなって助かった。
あと趣味で描いた人物画（誰を描いたかって？いいじゃん誰でも）
にどっかから来たじーちゃんの幽霊がとり憑いて、そいつの愚痴を
延々と聞かされたこともあったな。

『画霊』がれいというやつだ。

そつえば最近、変わった娘さんを見たな。

半透明の猫耳と尻尾が生えていたような…。

あれは化け猫の類だろう。

流行のコスプレでなければ。

…そんな感じで僕はこの21年間の人生でさまざまな怪異、つまり
妖怪と付き合ってきたわけである！

これは自慢できることだと思っ…多分。

僕はこの自己紹介という名の長い独り言が終わった後、描きかけの
絵があつたのでその作業に取り組んだ。

僕の一人部屋は二階にあるが、よほど声が大きかったのか、先ほど
の長い独り言は下の階にいた母に聞こえていたらしく、うるさいか
ら静かにしろと叫んでいた。

僕には母の声の方が音量的にうるさく思えたが、へーいと適当に返
事をしてまた作業に戻った。

…とその時だった。急に背中に寒気を感じたのである。

「ええーい、は！！！！！つく！」

思い切りくしゃみをした。

中年のオッサンがよくやる、ほとんど声だけのくしゃみだ。

最近いろいろとオッサン化して困る。

そろそろトシか…いや、まだまだ若いモンには…って、そんなことより…。

「部屋に何か怪しげなものがあるな」

長年の経験で培われた霊的感覚が、このような結論を導き出した。人の前に妖怪が現れる、または人から妖怪の方に近付いた時、感覚の鋭い人は、自分のいる周りの空気が変わったことを知る。

特別霊的感覚が鋭くない人でも、何らかの違和感を感じるはずである。

それは寒気だったり、また臭いだったりする。

幽霊がいるであろう墓地で寒気を感じたり、河童が現れると生臭かったなどという話はまさにそれである。

これは人間が、妖怪だけが持ち得る雰囲気や空気に触れたことを意味している。

魑魅魍魎ちみせうりょうが跋扈はつこしていた古き時代、人々はこの人間の住む世界のものとはちがう独特の雰囲気ふんいきに満ちた空間、「異界」と呼んだ。

それは万能ではない人間が理解し得ないものに対しての驚異であり、また畏怖おそそでもあった。

異界は妖怪だけが持ちえる怪しげな空間であり、また妖怪の棲む世界でもある。

妖怪はこの異界の中でそれぞれの力を発揮することができるのである。

つまり、僕の部屋の中に妖怪の何かが侵入してきたということだ。

そして僕の部屋は「異界」と化したわけである。
異界はなにも固定された場所だけとは限らない。
海や山、川のような、固定された空間を「異界」としてそこに棲んで
いる妖怪もいれば、妖怪が能力を発揮するために異界を広げるこ
ともある。

異界そのものが妖怪、なんてものまでいるのだ。

さて、こいつは自分から異界を広げる能力があるようだが、何者か。
そう思った瞬間、肩に冷たいものが触れた。

「やっほー」

「な…なん??」

僕は決して自分の後ろにいる「異界」からの使者にビビったわけ
ではない。

声が出たら元気なのにちょっと圧されただけだ、うん。

「こんにちは」

吃驚して振り向くと、色白でスマートな、けっこー可愛い女の子が、
僕の左肩に手を置いている。

時間的に「こんばんは」が正しいと思うが（午後8時に近づきつつ
あるので）、あえてそこはツツこまないことにしよう。

「私が人間じゃないことはわかってるよね」

「ああわかってる。君と同じようなのに何度も会ってるからな」

やや透けて見える手はやたら冷たかった。

そして死装束をまとって足が見当たらない。

典型的な『幽霊』の姿である。

幽霊か。

研究者によつては幽霊と妖怪は別物だというが、人間に対して怪異をなす点ではなんら変わりはない。

だから僕はこいつを妖怪として扱うことにする。

そうしたところでこの状況に何ら変化はないのだろうけど。

「ただ家の中に入られたことはないな。一体僕に何の用なの」

本当に何の用なのだろう。

どうせなら『座敷童子』あたりに来てもらいたかった。

「ふふん、何の用だと思う?」

知るか。

「人から恨まれるようなことはしてないはずだが。その前に君の顔を全然知らない。あ、さては全く関係のない人間をとり殺すタイプ

のモノノケか」

「失礼にや。私がそんな道理をわきまえない人…いや、幽霊に見えるのかにや？」

知るか（パート2）。

「鬱陶しいな。さつさとここに来た理由を言え！50字以内で述べよ！」

「うーんとね、私、あなたに惚れちゃったから、あなたと憑き合いたいなーって、思ってさ」

「お、40字でうまいくまとめたな…って、ええええ…!!?!？」

「私と憑き合ってほしいの」

「随分サラツと言っただな…ところで、付き合っの『付』が『憑』になってるのは筆者が間違えたのかな」

「私が幽霊だから、あえてその字を当てたのかな」

「あえてって…意味が全然違うだろっ」

「私にとってはどっちも同じ意味だから、そんなに気にしなくていいんだよ。それよりさ、憑き会ってくれるの？くれないの？もしかして…私のことが嫌いなのか？妖怪が好きみたいだから、大丈夫だと思っただのに…」

「何を勝手に進めてんだ…。妖怪に興味があるのは確かだが……いきなり言われても困るよ。それにまずキミの名前を教えてください。順番がむちゃくちゃじゃないか」

「それもそうね…よし！5分時間をあげるから、早く結論を出してちょうだい。………決めた？」

…人の話を聞いてない。

そして5秒しか経ってない。

死んでる人間と生きてる人間の時間の感覚はここまで違うのか。

…口では明るく「惚れた」とか言ってるけど、どうせはじめから僕をとり殺す気でいるのだろう。

「憑き合う」ってのがやつぱり本当なんだな。

「合う」の意味がよくわからないが。

とうとう自分にもとり殺される日が来たか。

できれば死ぬ前に大好きなソース焼きそばを腹一杯食いたいのだが、彼女は許してくれるかしら。

と思っていた次の瞬間、また新たな気配を背中に感じた。

「?!?!」

何だ？気が遠くなっていく…。

ふにゃ…僕が一体何をしたって…いうん…だ……とり憑くのは…一匹で十分だ（ホントは一匹も要らんけど）……うっ……ばたんきゅー！。

「何なの??」

何やら笠を被った狐…?のような胴体のやけに長いケモノが、徐々に半透明になりながら真実の体の中に入っていく。
真実はすでに意識を失っているようだった。

「やばい!とり憑かれる…」

遅かった…。

この部屋は私の異界の力で支配されていたはずだったが、まったく油断していた。

そのせいで他の妖怪の侵入を許してしまったのだ。

真実の目が赤く光り、ケモノの尻尾がぐんぐんと伸びていく。

すると真実は急に四つん這いになり、窓から外へ勢いよく飛び出していった。

うーん…はつきり言って、カッコ悪い。

ここ笑うところじゃないんだけどな…あはは。

ケモノにとり憑かれているためか、人間ではありえない身体能力になっているようだ。

そのまま自らがつくり出したつむじ風に乗り、飛び去っていく。

「…追わなきゃ!」

詩季美は窓からふわりと外に出ると、急いでた狐憑き（かな？）を追いかけた。

幸い相手のスピードはそれほど速くなかったので、なんとか追いつくことができた。

真実+ は段々後ろから近づいてくる気配を感じると、自分の尻尾から毛を耨り取り、それを吸い込んでこちらに体毛の混じった気持ちの悪い風を吹き付けてきた。

細かく粗い体毛が風に乗ってもものすごいスピードで私の身体をかすった、と同時に着ていた白装束に切れ目が入る。

これがヤツの力か。

そう思いながら、私も右手に力を集めた。

そしてヤツがまた風を起こそうと深く息を吸い始めた時、勢いよく手を伸ばして力を放った（もちろん、真実の身体のことも考えての威力である）。

それはちょうどヤツの腹に命中し、溜めていた風が吐き出される。逆噴射するような形でヤツは落下していったが、くるりと体勢を立て直して綺麗に着地した。

可愛い詩季美ちゃんも、ヤツから3〜4m離れたところにふわりと優雅に降り立った。

ただっ広い空き地で2つの妖怪が、そしてそれぞれの「異界」を広げた。

異なつた怪しい空気がぶつかり合い、はじける。

どうやら私たちは仲良くなれそうにないわね、カマイタチくん。

だからって真実とくっつくこうたって、そうはいかないわよ（この場合の「くっつく」とは仲良くなる、の意味である。とり憑かれてんだからもうすでにくっついてんぢゃねーか！と抗議が飛ぶ前に、念のため）。

相手を自分の異界に引きずりこむことができれば話は早いが、今の私にそんな力はない。

それならば。

私は再び「異界」を呼び出し、右手にその力を集中させた。カマイタチくんは相変わらず目を赤く光らせている。

(本気で撃つてしまえば真実の身体が危ない。それならば)

軽快な音とともに力が放たれ、ヤツの足元で爆発した。

優秀な詩季美ちゃんの予想通り、ヤツは得意げにジャンプでかわしそこから、今度は相当威力のありそうな爆風を吐き出した。

爆風は砂を巻き上げて辺り一面を真っ白にしてゆく。

勝利を確信したかのようなポーズ。

「何変なポーズとってんの？真実を返してもらおうよ」

はは、ビビってる。

ギリギリのところまで攻撃をかわし、後ろに回りこんだ私にまるで気がつかなかったようだ。

私はそのスキに真実の身体に手をもぐりこませ、憑きものをひっぺがえした。

と同時に真実の身体は無様に落下した。

「あ、空中だったわねここ」

つかんでいる憑きものは苦しそうにもがいている。

「今回だけは許してあげる。次に真実にとり憑りついたら…どうしようかなー」

言い終わった後手を放してやると、哀れな妖怪は慌てて逃げていった。

「さて、落下した私の彼氏は大丈夫かしら」

「体中が痛いんですけど」

ちょうど落下したところに草がたくさん生えていたので、大怪我は免れたようだ。

それにしても、あんな高いところから落ちたのにかすり傷程度とは。

「まあ、痛いっっちゃ痛いけど大丈夫だ。生まれつき身体だけは丈夫にできているらしいから。運動とか筋トレはあまりしてないはずなんだが」

そついうと、真実はにっこりと笑ってみせた。

「…助けられて、ありがとな。お礼に…というのもおかしいかな、君と憑き合ってやるよ」

「…え？ほんと?!」

「なんだよ。さっきまであれほど言い寄ってきたくせに。僕さ、今まで惚れられことなんて一度もなかったから、正直なところ嬉しかった。それに、いつから僕のことを知っているのか、僕のどこに惚れてくれたのかも気になるし。第一…君に成仏してほしいし。一度も恋愛することなく死んでまったことが口惜しくてしゃーなかったんだろ?」

「…わかってたんだ、私がこの世にとどまってる理由…」

「何となく。可愛い顔してるから、まさかなーとも少し思ったけど。あ、ただし、ひとつ条件があるぞ。名前を覚えてくれたらな」

私の霊体からだは冷たいはずなのに、なんだか熱い。嬉しい!

「…詩季美ちゃんです。真実、よろしく!!」

「ほー、なかなかいい名前…て、何で僕の名前知ってんだ」

「細かいことは気にシナイ!ねえ、これからデートしない?」

「ええ???今から?」

「いいじゃん。妖怪好きなんでしょ?友達の妖怪とか紹介してあげるよ」

ところで、真実にとり憑いた妖怪、つむじ風に乗って移動しカマイタチを使う特徴からして、恐らくあいつは『管狐』だ。
『鎌鼬』という妖怪かもしれないが、多分管狐だ（詩季美ちゃんの勘）。

管狐は竹筒のような管の中にも入れるほど伸縮自在な狐で、『飯綱』とも呼ばれる。

問題は管狐は誰かに使役される妖怪だということである。

誰かに飼われていたものが逃げ出して人を襲う、という話もあり、その可能性も十分にあり得る。

しかしもし誰かの命令で真実を襲ったのであれば、真実はそいつに狙われる身であるということになる。

管狐（飯綱）の持つ異界は狭く、竹筒のような空洞体の中がヤツの棲み処だが、考えてみれば魂の容れ物である人体も空洞体といえるかもしれない。

つまりヤツは真実の体の中を異界化することであれだけの力を発揮できたということだ。

また、野生化して力を持った管狐は主に山道に鎌鼬となって現れるという。

そうなるとあいつはやっぱり鎌鼬か？うーむ……

ま、それは今後考えるところとして、今はデートだデート！

私は今、好きな人がいます。

つまり私は今、恋をしてるんです。

猛烈に恋をしてるんです。

私の名前は菅原茅野すがわらちのといいます。

ごく普通の、物静かな女子高校生です。

趣味は、意外に思われるかもしれないませんが、エレキギターを弾くことです。

でもまだ始めて半年くらいなので、腕はまだ全然です。

はやくあの人みたいにかっこよく弾けたらなーなんて、思ってます。

「あの人」っていうのはもちろん、私が恋をしている人です。

早いもので、あの人を好きになってからもう1年経ちました。

一目惚れでした。

私の学校の同級生で（ピー）君っていうんです、スタイルが良くて、顔も声もかっこよくて。

バンドのヴォーカルをやっていて、ギターの腕もすごい！

おまけにピアノまで弾けるんです。

あ、あと学校の成績もトップクラスで、この人には苦手なものとか欠点とかあるんだろうかって感じの人です。

単純ですよ…私。

彼とは一度もまとともに会話をしたことがないのに、彼の性格とか、肝心なことを何も知らないのに。

でも、一目惚れってそういうものじゃないですか。

この物語の作者の某もこういう恋愛、したことあるみたいですよ。惚れた瞬間に突き上げるような胸の痛みを感じたそうです。

私もそうでした。

苦しいのに嬉しい、とても変な感覚で、自分では全く制御できません。

その後も彼と接近したときはもちろん、夜布団に入ったときにも、そいつは襲ってきます。

全く眠れない日が続きました…。

…それで、私の恋は1年経ってどうなったか？
どうもなっていないです。

…って言ったら嘘になります…ね。

はい、嘘です。

失恋…しました。

彼にXさんっていう彼女がいることを知ってしまったんです。

何で今まで気づかなかったんだということになりますが、それは2人は遠距離恋愛中だったからなんです。

最近Xさんが彼の住む町の近くの町に引っ越してきたらしくて、近距離恋愛（つまり普通の恋愛）になってしまったのです。

ショックでした。

人伝に聞いたことだからただの噂だと自分に言い聞かせましたが、見知らぬ女子と仲良く、というよりいちやつきながら歩いているのを目撃してしまっただけ、どうしようもありません。

その女子（Xさん）は彼と同じくスタイル抜群で、聞いた話によると帰国子女で英語がペラペラ。

私ごときが勝てるわけありません。

学校であのパーフェクトなカップルを噂話を耳にするたびに、私の胸はまた痛むようになりました。

あのと感した痛みとは全く違いました。

胸から喉にかけて、その中に何か大きなものが詰まっっていて、それが外に出ようとしているような、とても重く気持ちの悪いものでした…。

「んん…ここは??…どこだろう?」

気がつくとき茅野^{わたし}は真つ暗な空間の中にいた。

何があるのかも、また何がないのかもわからない、自分の姿すら見えない闇黒の空間に私は立っている。

「これは…夢だよね…。生き埋めにでもならない限り、こんな完全な暗闇はありえないし」

そう、夢だ。

きつとそうだ。

眠った記憶がある。

いつも通り疲れて学校から帰ってきて、夜ご飯を食べて、お風呂に入って。

そして布団に入りながら本を読んで、ウトウトと…あれ?

何気なく動かした右足の指先に何かが触れた。

ゆっくりとしゃがみ手で探してみると、触った感じ手のひらサイズの長方形のものをつかんだ。

「本だ…寝る直前までに読んでいた本…」

どういうことだろう。

やはりここは現実?…の延長線上なのか。

わからない。

それに…なんか身体がだるい…。

その時、正面に突然光るものが現われた。

私は眩しさに目を瞑った。

光が弱まったのを感じて目を開けると、七色に輝く謎の球体が宙に浮かんでいた。

その中心に、何か深い青色のモヤモヤしたものが見える。

こんなこと、現実世界ではありえない。

やっぱり夢なんだ。

球体は輝きながら、まるで蕾が開いて花が咲くような動きをして…

一輪の虹色の花になった。

よく見てみると、中の青いモヤモヤもおしべとめしべの形に変化している。

「あなたはまだ、彼のことを好きで好きでたまらないんでしょう？」

突然、目の前の花から、そのような言葉が発せられた。

「…え？」

だるさはさっきよりも一段とひどくなり、身体が思うように動かない。

それよりも恐ろしかったのは、花の声が自分の声にそっくり…いや、紛れもなく自分の声であったことだ。

「な…」

「驚くことはないよ。ワタシはあなたの心。あなたのことを知っていて当然。ワタシは、あなたが恋を成就させたい！！！！…といふ想いから生まれた、もうひとりの菅原茅野なのよ」

これは…夢だ。

「そつ怖がらなさんな」

夢だ。

「そう、ここは確かに夢の中だよ。でもワタシは夢でも幻でもない、ちゃんとした『存在』なのよ」

「…」

「まあ、これから嫌でも理解することになるわね。じゃ、今回はこのへんでー」

「！…！！…！！」

ヤツが適当に話を切り上げたとたんに、私は現実世界に引き戻された。

自分の部屋の布団の中。

傍らには読みかけの文庫本。
やっぱり、夢…だったのか…。
気分はまだだるいままだった。

3 .

「ん」

誰かが真実まことの上着の袖を引いてくる。

パツ！！！！と振り向けば、誰もいない。

歩き始めればまた引いてくる。

妖怪『袖引き小僧』がついてきてるようだな、こりゃ。

特に害はない妖怪だが、少しばかりうっとおしい。

まあ、相手にしなけりゃそのうち飽きて消えちまうから、放っておけばええのだ。

大したことはないのだ。

なにせ俺にはむおおおーっとうっとおしい妖怪が近くにいるのだから。

「やっほー」

ほら、コイツだコイツ。

「詩季美、やめろ、憑くな、病気になる。俺はまだ死にたくない。お前の仲間にはなりたくない」

「そんなことしないっつーの。力の加減を知らないそこらの憑きものといっしょにすんな」

「わかったよ。とりあえずもう少し離れてくれ。気分が悪くなる」

「何よー。あ、ホラ、私に恐れをなして『袖引き小僧』、逃げてったわよ。エライー!!私」

うん、偉いと思うよ。

とっても。

とっても。

とーってもね。

少々うっとうしいと思う時もあるけれど、なんだかんだ言って彼女のこういところか可愛らしいというか、魅力なんだと思う。憑き物を剥がしてもらったという借りもあることだし…まあ…。

「あれ、茅野ちゃんじゃない」

彼女は突然足を止め（そういやこいつには足が無かった。けど細かいことは気にすんな）、10mほど先の横断歩道で信号が変わるのを待っている、中学生？くらいの女の子を見ながら言った。

髪の毛は全体的に短めで、やや灰色がかった色をしている。

前髪を綺麗に切りそろえており、まだ幼い少女のようで可愛い。って、なんか気が遠くなってきた。

ままままさか、姉さん、憑依ですか…;

どういっつもりなん…ううううう…おおおっい…く、くは…ぐえ。

「久し振りー、茅野ちゃん」

振り返ると、見たこともない若い男が、ニコニコしながら立っていた。

「私が逝ったのが3年とちよと前だから、そんな時私は高3で茅野ちゃんは今中2か。あの時と全然変わらず、可愛いわねー」

え？

誰なのこの人。

茅野^{わたし}のことを知ってる??

何で女の声???

なんか聞き覚えのあるような…。

「信じられないと思うけど、私、詩季美姉さんよ」

「詩…季美…姉さん??」

「そ。私のナイスバディは残念ながら今はもう無いから、しかたなくコイツの口を借りて話してるわけね」

そこにいるのは大したことのない…じゃなくて、会ったことのない男だが、その声は確かに詩季美姉さんの声だった。忘れるわけがない。

早くに両親を亡くした私を、兄弟のいない私を、実の妹のように可愛がってくれた「姉さん」…。交通事故で死んだということを聞いて、そのまま自分も死んでしまいたいほどショックだった。

独りになるくらいならむしろ私も姉さんといっしょに逝きたいとまで思った。

どうして私は、大切な人を次々と失っていくんだろう、神様が決めたことなら、是非そうした理由を聞きたいとさえ思った。

でも、今こうして「姉さん」が、姿が変わってしまっただけはいるが、目の前にいる。

これも神様が仕組んだこと…？

あの不気味な夢を見たり、死んだはずの姉さんが現れたり…次は何？姉さんと再会ができて嬉しい、ということよりも、これから自分の身に起こることは何なのか、それに対する恐怖のほうがはるかに大きかった。

夢：そうだ、夢の中に出てきたあの「夢でも幻でもない存在」が言っていたこと。

「これから嫌でも理解することになる…」

わからない。

わからなけど、何かいやな予感がする。

「どうしたの？茅野ちゃん。久し振りに会ったってーのに、やけに暗いわね。あ、まー、男が女コトバ…というか女の声で話してるのを聞いたら、誰だって吐き気してくるよねー」

「あ、いえ、確かに違和感は覚えるけど、そんなんじゃないです。詩季美姉さんの声が聞けて、ホントに懐かしくて、嬉しかったです。うん…あ、涙が出るほどです」

「そっか。わたしも幽霊になってさまよっている時に偶然茅野ちゃん見つけて、思わずコイツに乗り移って話しかけちゃった」

「姉さんの話を聞いてると、幽霊も悪くなさそう…あ、私これから用あるので、失礼します」

「うん、わかった。じゃ〜ね〜」

「さて、どうやって退治しようかしら、茅野まのの心にとり憑よいているバケモノを」

4 .

「お前なあ、何の断りもなしに真実ほんの身体を拝借するのやめてくれないか。かなりコタエルんだからな」

「ごめんごめん。お詫びに近いうちに黄泉の国に招待してあげからさ」

そりゃ死ねいうことですか、姉さん。

「それよりもあのコ、厄介なモノにとり憑かれてるのよ。なんとかしないと」

「え？確かに元気がなさそうだったが、そんな感じはしなかったがな」

「心配がしなくて当然ね。とり憑いているのは茅野ちゃん本人なんだから」

「ん…どういうことだ」

「『心の鬼』ってやつよ」

「『生霊憑き』の最たるものよ。激しい心の揺れから生まれた『別人格』、とでもいっべきかしら。あのコの場合、心の揺れの原因は恋煩いよ」

「なるほど。しかし、それだけで心の鬼と呼べるほどのものが生まれるのか？恋の病に苦しんでる若者なんて（作者を含めて）山ほどいる。それならそこらじゅう『生霊憑き』だらけじゃないか」

「もちろん恋をしただけではそんなもの生まれえないよ。『生霊憑き』が生まれるには条件があるのよ」

「敵いそうもない恋敵が現れて嫉妬がプラスされたとか？」

「そうね。そしてさらにあのコは思いつめやすく、悩みやストレスを極限まで溜め込む性格なのよ。普通の人間ではありえないほどね」

「それがとうとう限界地点まで達した…」

「そいつが強力な力をもって暴れ出したらやばいわね」

「生霊ね…」

真実は思わず溜め息をついた。

生霊になるのは極端に思いつめるタイプとか、恐ろしいほど嫉妬心が強いなど、心の働きが並大抵ではない人（特に女性）に限られる（ようなきがするぞ！）。

生霊憑きの話は少ないが、生霊になるのは大概女性であり、その原因が恋愛などの男女関係の中の心の揺れによるものがほとんどである。

それは恋人に裏切られたことによる怨念だったり、恋敵に対する嫉妬だったりする。

少女どのような恋をしていて、現在彼女がどのような状況下にあるのかは知らないが、心の内にバケモノを宿してしまうほどであるから、それは辛く苦しいものであるに違いない。

真実は、まるで自分のことのように心が痛んだ。

自分も今までいろいろな妖怪に遭遇してきたが、自分の中に妖怪が棲んでいて、しかもそれが自分自身って…どうなんだろう、と思った。

それって人間が妖怪になってしまった…ってことだよな…。
「心の鬼」…か。

「きゃっ！な、何？？？何なのよ、誰なのよアンタ。ちよ、何すんのよ！やめてよ！あっ…！」

ギョッ…バキッ…ドサッ

「はっ」

茅野^{わたし}は夢の中から急に現実世界に呼び戻された。

何なの…あの夢…。

私が…私が、女の子の髪の毛を引っ張ったり、殴り飛ばしたり、首を絞めたり…。

しかもその女の子…彼の彼女だった…。

時間はすでに7時を回っていた。

私は重苦しい気分のまま顔を洗い、髪を梳かし、朝食を食べ…家を出る。

私、どうしちゃったんだろう。

変な夢やいやな夢を見るのは、そう変わったことでもない。

だけどあの夢は…。

しかも気持ち悪いことに、彼女を殴ったり、首を絞めたりした時の
感触が、しっかりと手の中に残っているのである。
いやな予感が…する。

1キロ先の学校が、やけに遠く感じた。

翌日になっても、まだ手の感触は消えていなかった…。
教室に入ると、隅の方で何人かがザワザワと話していた。

「おはよう。ねえ、何かあったの？」

「あ、茅野おはよう。実は…（ピー）君の彼女のXさんが、一昨日
の夜に強盗に遭ったらしいの」

「強盗じゃねえって。何も盗られてない」

「とにかく何者かに襲われたらしいのよ。かなり酷い暴行を受けて、
意識不明の重体らしいわ…」

「おかしなことに、誰かが侵入した形跡がないんだと。見つかるの
かな、犯人」

私は、みんなの話をただ黙って聞いているしかなかった。

「もうその話はやめろって言うてるだろ」

突然彼がやってきて、そう言った。
何だか、とても怒っている。

当たり前か。

大事な彼女がわけのわからないやつに意識不明にされたんだから。きつとあいつだ。

あの…花のせいだ。

間違いない。

夢の中であいつが言っていたこと。

「これから嫌でも理解することになる」

今やっと「理解」した。

あいつは茅野^{わたし}だ。茅野は、Xさんを憎んでたんだ。

彼に恋をして、胸が苦しくてしかたなくなつたあの日から、茅野はXさんを殺そうとしてたんだ…。

私が…。

目の前が急に真っ白になった。

「やっとわかつたかい？」

またあの花が、私と同じ声で話しかけてくる。

考えてみれば、当たり前前の話だ。

あいつは私なんだから。

よく見ると、花は前に現れた時よりも少し大きくなっているような。しかもその下のほうに、新たな蕾が2つ3つできている。

「ん？私はね、茅野^{アンタ}の恨みの力を利用して『怪異』としての力をこ

の蕾に蓄えているのだよ。きつと綺麗な花が咲くよおー。…にして
もさあ、もうちょーっとアンタの恨みが強ければ、ドッカーンと成
長できんだけどねえ。最近揺らいでんのよ、アンタの恨みの気持ち
が」

「…」

「憎いんだつたらね、とことん憎みなさいよ。中途半端なのが一番
いけないんだから」

そ、そんな…私は…。

「彼に近づく女は全て敵！ぐらいの気持ちでいなきゃ恋愛は成就し
ないのよ。まあ、花^{わたし}茅野^{アンタ}だってわかったところで、安心したる？
私は敵じゃない。他人じゃない。自分の心だ。自分以上に信用でき
るヤツが他にいるのか？いるわけがない。信用していい。お前が私
を信じてくれれば、私は強くなれる。何だってできる。必ず幸せに
なれる。だから、私を信じるの！わかった？」

5 .

「おい真実よ」

「YO真実ちゃん」

フィギュア付き携帯ストラップが僕に話しかけてくる。

こいつは『付喪神』という、器物類が化けた妖怪だ。

こいつは僕がだいぶ前にガチャガチャで当てたやつだが、その時全

く同じものを2つ出して、片方を紛失してしまった。

失くした方がこいつの「弟」だったらしく（血の繋がりは…恐らくないと思われる）、兄弟間の親密な距離を引き裂かれたことで恨みを持ち、妖怪化したらしい。

『付喪神』ってのは百年に及ぶくらいの長い年月をかけて妖怪化するもんだと思っていたが、こういうのもいるらしいな。

やたら耳につく怪音で恨み言を訴えてきてうっとうしかったが、詩季美が「弟」を見つけてきてくれて、漸く音は止んだ。

今は兄弟仲良く部屋に飾られているが、僕が疲れたり気分が悪くて休んでいる時に限ってやたらカランでくる。

…何か余計うっとうしくなったような気がする。

「何だよ…」

「最近幽霊ネーチャンとイチャついてねーみたいだけど、どうしたのよ？」

「どうしたんだYO？」

「知らん」

本当に知らなかった。

詩季美はここ二三日、つまり彼女の知り合いの女の子が生霊にとり憑かれているとわかった日からしばらくの間、ほとんど会話をしていないのだ。

あの子があいつにとって妹のような大事な存在だというし、だからこそあいつが生霊を何としても退治したいという気持ちもよくわかるのだが、そんな、何も一人で頑張らなくてもいいじゃないかと。

いや、さびしいわけぢゃなくてだな（少しさびしいけどな）、この僕も一応、あいつの身近にいる存在だし、もうちつと話してくれてもいいんじゃないかなーと…ブツブツ。

「もしもし」

僕が心の中でグチグチ言っていると、突然庭の方から声がした。

「詩季美さんから聞いたのですが、あなたがマミさんですか」

「え、いえ、まみ真実ではなくまこと真実です。あいつから聞いたんであれば、人違いではないでしょう。というか、どこにいるんですか。姿が見えませんが」

見えなくても雰囲気が伝わってくる。

間違いない妖怪だ。

…というか、詩季美のヤロー、名前ちゃんと教えるよ。

「今私は精気のみ状態なので、これといって姿は…。本体はうんと離れたところにあるんです。こんな姿でお伺いしてすみません」

その「こんな姿」もわからなくてすみません。

「では、何の精なのですか」

「福島の妖怪で、『血桜』と申します。蛇の血が混ざっているためにこんな恐ろしい名前をいただいてますが、まあ、桜の精ですね」

「それはまあ、わざわざお越しいただいて。それで、僕に何か？ 詩季美の知り合いですか」

「あ、はい。それはまあ仲良くしていただいて。それですね、詩季美さんからあなたに伝言を預かっております。ええと、月×日の 時ちょうどに、（ピー）公園に行くから。何があるかは当日のお楽しみよ。それまでは私に聞いてもムダよ。いいわね！！！！……とのことです」

……ヤツの声色使って報告しないでくださいよ。
てか物まね上手っ。

今のほとんど本人だったぞ。（そんなの読者にわかるか わかんないスね、すみません）

「りよ、了解しました。わざわざすみません」

「いいえ。では、私はこれから仕事があるので、これで失礼します」

『血桜』さんが言い終えたのと同時に、その気配もすっかり消えて無くなった。

「ふう。あの妖怪、なかなか強い力を持つてるみたいだ。」

「当たり前だ。福島の『血桜』だZ E」

「そうだけ」

付喪神たちがそう言った。

『血桜』の魂が来ている間は異様に静かだったのに。またしばらくやかましくなりそうだ。

「何だお前ら、あの妖怪のこと詳しいのか？」

「昨日たまたまネットで見たんだよ」

「そうなんだYO！」

なんじゃそりゃ。

そいじゃ知ったばかりで全然…て昨日？

いつネット使ってたんだ？

どうやって???

むしろ聞きたいのはそこ…おい。

あれ？無視？

「なんでも大蛇の霊と融合してるみたいだよ、樹液の代わりに蛇の血が流れてるらしいぜ」

「あとさ、年に三回、しかも普通の桜と違う色の花を咲かせる能力を持ってららしいZ E」

あーはいはい、そうですか。

となるとあの人…じゃなくて妖怪が言ってた仕事ってのは、その花を見せることだな、多分。

一体どんな色なんだろう？

ん？てことは、詩季美の伝言にあった公園に来いってのは…。

「きつとさ、あの幽霊ネーチャン、『血桜』に依頼したんじゃないの？ 月×日にデートするから、公園で花を咲かせて待っててって今の時期じゃ桜なんて咲いてねーからな」

「こーいつは貴重だぜえ！年に三回咲かすうちの一回を見られるわけD A」

「それにさ、×日つつつたら、真実の誕生日じゃんかよ。あれ？、もしかして気付いてなかった？自分の誕生日だろお？『血桜』の伝言聞いた時に気付けよ！」

僕はただ、付喪神たちが嬉しそうに騒いでるのを、ふわふわとした気持ちで聞いていた。

そうか、やっと気付いたよ。

あいつが僕のためにそんな計画を…。

あいつがねえ…。

…だが、この胸がアツくなるような感覚は何だろう？？

「YOかったなあ真実。俺達も連れて行けよな。せつかくの貴重なチャンスを逃すわけにはいかんからな」

「わかったわかった。よおおーくわかったって。ははは…あーアツいアツい。なぜかアツい」

「そんなもの、恋の炎のせいに決まってるだろうがよ。コラ、ふわふわしてやがる。今からそんなんでどーする！シャキッとしゃがれコラ」

（生霊事件のことをすっかり忘れている真実であった。付喪神も聞いて一応知っているはずだが、彼らのことだ。どーせ忘れとる）

6 .

昨夜、茅野^{わたし}の夢に花^{あいつ}は現れなかった。

しかし消滅したわけでは絶対ないだろう。

この異常なだるさ、体の重さが何よりの証拠だ。

まるで自分と同じくらいの重さの人間を一人背負っているかのような感覚であった。

そして喉の奥から何かが這い出てきそうな気持ち悪さ。

とても学校に行けるような状態ではないにもかかわらず、なぜか自然と体が動いてしまうのだ。

心配する両親の言葉の間をすり抜けるように、茅野^{わたし}は家を出た。

学校に着くと、そこにはいつもの何ら変わらない日常があった。

そして、いつも通りの席に座る。

体も少し、楽になったような気がする。

これなら今日一日なんとか無事に過ごせるかもしれない。

そう思いながら廊下の方に目をやったその時だった。

「あれ？」

彼が見たこともない女の子と話している。

他クラスの娘か、それとも後輩？

何を話してるんだろう。

そう思ったとき、彼女の口から衝撃的な言葉が発せられた。

「せ、センパイ、好きです！」

(え)

言葉が渦の様になって頭の中を駆け巡り、掻き回していく。

(告白？あんなに距離があるのに、なんで聞こえた??なんで??
?なんでなの????なんでなの????なんで彼は嬉しそうなの???
?有り得ない!?)

(そう、有り得ない。有ってはならない)

次の瞬間、彼の後輩の女の子は雷に撃たれたように硬直し、そのまま倒れてしまった。

そして、それと同時に悲鳴が上がった。

「はっ」

何？今の…。

憎悪が…憎悪が…塊になって、彼女の胸を貫いた…。
私が…。

「すごいでしょ」

「…何がよ」

「茅野の力に決まってんじゃない」

「あの娘にあんなことして…私…」

「あの女は邪魔者。邪魔者は排除する。道を切り開くには、それくらゐのことはしなくちゃ」

「あの娘はどうなったの？」

「さあねー。私にはわかんない」

この…悪魔め…。

「ふう…あと少し…あと少しで彼が自分のものになるよ。そのためには、オマエの、茅野の強い意志が必要なのよ。Xにとどめがさせなかったのは、オマエの思いが足りなかったからだ。あと気になるようだから教えてやる。さっきの娘も消せてない。これもお前の力不足のせいよ」

そうか…よかった…。

「いやいやいや、よかったじゃねーし。あの女どもが憎いんじゃないの？私の彼になるはずだった、あの人を奪おうとした女どもをさ。まったく、あなたの憎悪の力さえ上がれば、茅野は強くなれるのに。茅野は一つになれるのにさ。さあ、あの女をもっと強く憎みな彼を必ず茅野のものにするんだと、強く念じるのよ」

「わ…私は…」

「ムダよー」

え???…詩季美姉さん？

「な、何で…何で入ってこれたの…ここは茅野だけの世界なのに…」

「それだけアンタの力が弱いつてことね。そろそろ限界なんじゃないな」

い？やめたら？」

「ね、姉さんは引っ込んでて」

「化怪茅野に姉さんなどと呼ばれたくないわね」

「これは茅野わたし自身の問題よ。姉さんには関係のないことだわ」

「そうね。それはわかってる。心配しないで。私はアンタの邪魔をしに来たわけじゃないから」

「…」

「茅野はXさんや他の女の子を殺そうとなんて少しも思っていないって言いに来たのよ。だからアンタが何言ってもムダだったこと。ねえ茅野？」

「…」

「遠慮なんかしないでいいのよ。化怪茅野あいつはあんたの一部でしかない。いや、それ以下の存在よ。わかってるでしょ」

「う…う…う…う…さあぁあぁい…！！！！」

悪魔の花は私（の一部）とは思えないほどの大声で叫んだ。蕾を一気に開花させ、強い光を姉さんに向かって放った。大きな爆発が起こる。

その次の瞬間、そこに姉さんの姿はない。まさか…。

「邪魔者は消えたかな？」

邪悪な声で花は笑う。

私は…私の心はここまで腐っていたのか。
情けない。

「…えて」

「は？」

「消えてよ」

「私はXさんも、後輩の娘も恨んでなんかいない。私は彼に幸せになつてほしいと思つてた。彼はXさんといふことが幸せなの。Xさんが死んだら、彼はどんな気持ちになる？後輩が死んだら？化怪茅野たんはそんなこともわからないの？」

私は一気にしゃべつた。

花の表情などわからないが、呆気にとられているようだ。
今度はとても小さく見える。

恐怖など、微塵も感じなかった。

「その上、詩季美姉さんまで…茅野わたしはそんなことしない。あなたは私じゃない。だから…消えて…！！！！！！」

・
・
・
・
・

ふと気がつくと、私はベッドで眠っていた。
ここは…保健室？
そうか。

私、前の時みたいにまた気を失って…。
今までのことは、全部夢だったのかな…。
姉さん…どうなったの？
姉さんも幻だったのかな。

いや、違う。
姉さんはあんなことで消えたりしない。
またきつとどこかで…。
私の心は、まるで春が来たみたいに明るく穏やかだった。

7 .

数日後、ほく真実としきみ幽霊は、目的地の（ピー）公園を目指していた。

「ふう、昨日は疲れた」

「…珍しく僕から離れて、何してたんだ？」

「ん？そりゃーもちろん、茅野ちゃんにとり憑いてたバカに喧嘩売りにいったのよ。何？私がいなくてさみしかったの??？」

いや全然。

…いや嘘です。

さみしかった。

少しだけ。

何で僕にも協力させてくれなかったのさ、ぐすん。

詩季美は何も教えてくれないが、口振りからすると「生霊（心の鬼）」はうまく処理することができたようだった。

「今日は花見の日よ。忘れてないでしょうね」

「そんなわけないだろう」

「そんなわけないだろうがよ」

「そんなわけないだろうがYO」

付喪神たちがうるせーんだ。

いやでも忘れない。

「あ」

交差点の向こう側で、菅原茅野が信号を待っている。

彼女もこちらに気付いたようだ。

信号が青に変わり、彼女は駆け寄ってきた。

「あ、あの…」

「初めまして」

「え？あああ…初めまして…」

詩季美姉さんは僕の隣にいるんだが、見えないよな。

「あの…ちょっとお話…してもいいですか」

「え？ああ、うん、いいよ」

彼女の意外な言葉に、声が裏返ってしまった。
ん？よく見ると彼女の頬が紅色ではないか。

か、可愛い…。
それとは正反対のコワイ顔で、半透明のお姉さんが僕を睨んでいる。

アホ、心配すんな。

今日は花見だ。

デートだろ？付喪神も一緒だけど。

それに、僕は彼女は一人しかつくりたくない主義なんだからな。

1 .

俺はまた家を出てしまった。

え？お前は誰かって？「若者」とだけ言っておこう。

ある8月の暑い真夜中に、その「若者」は多少の後ろめたさを感じつつも、寝巻き代わりのTシャツと短パン姿で、サンダルを履いて外に出てしまった。

そして、なるべく音を立てないようにヒタヒタと歩いた。

携帯電話の時計を見ると、午前2時を少し過ぎたところだった。当たり前だが、辺りはまだ真っ暗でとても静かだ。

歩いている人間は俺一人。

少し強めの夜風に吹かれながら、誰もいない公園に着いた。

近所にある公園で、造られてからまだ3年と新しい。

大理石でできたベンチの前に立つと、俺は短パンといっしょにトラックスを下ろした。

そして次にTシャツを脱いだ。

2つ並んだベンチの一方に衣服を置いたら、準備完了だ。

サンダルを脱ぎ捨て、一糸まとわぬ姿でベンチの上に横たわった。

夜風が体中を愛撫し、あまりの快感に身体が震えた。

そう、これが俺の週に一度過ぎす至福の時間なのである。

毎回通りしばらくベンチの上で悶えたあと、そのままの姿で公園の遊具で遊ぶのだ。

体中に風を感じるブランコや、金属部分が直接肌に当たってヒンヤリと気持ち良い滑り台。

誰かに見られているのではないかという不安すら消えるほどの恍惚。裸足なので当然汚れるが、家に帰った後で洗えば済むことで、大した問題ではない。

一通り遊具を使い終わると再びベンチに横たわり、ひたすら撫で擦った。

俺が何をしているかは、言うまでもないだろう。

この時がまさに、至福の中の至福である。

ああ、心地よい。

夜風と自分の手の同時攻撃に、コレが耐えられるはずもない。

間もなく俺は「昇天」した。

手を離し、裸であることに飽きたその瞬間、夜風ではない存在感のある何かが、先端をすうっと撫でた。

何だ??俺はギョツとした。

あの感じは明らかに「手」だ。

誰かの手が、触った。

しかし辺りには誰もいない。

あんなに心地よかった夜風が、今度はどろりとまとわりつくようであんなに心地よかった夜風が、今度はどろりとまとわりつくようであんなに心地悪い。

この公園全体が、異様な空気に包まれているようだった。

俺は急いで服を着ると、逃げるようにその場を去った。

シャワーを浴びて、まとわりついた「感触」を早く洗い流したかった。

2 .

作曲 楠詩季美（予定） 作詞 機殿真実

（イントロ）

じゃらるらじゃらるらじゃらるらじゃらるらじゃらるらじゃらるら
じゃんじゃんじゃんじゃん

楽しそうに手を繋ぎながら 目の前を横切っていった
もう知らないと涙ぐみ言うその顔と 一瞬だけ目が合った
テレビやCDがいつもも言っていること 僕には未知の世界
まだ知らないだけの世界だ きつと

(サビ)

眩しい笑顔描くと向日葵とは今日はもうお別れ
夢の中までお預け
後ろの人を気にせず 大胆暴走は妄想の中だけ

いつだって見つけるのは高嶺の花 他人の花
友達の壁は時として妖怪のように立ちはだかる…

(…)

「…これ何の歌詞?？」

「心に沁みるいい歌詞だろう。俺が高校生の時に徒然なるままに書いたものだ」

「だいぶ無理してる感があるんだけど」

「何を言うか！叶うはずのない恋をしてしまった悲しい高校生」僕のどろじょうも無い思いを…」

「…わかったわよ。どうでもいいけど、なんで作曲者が私になっ
んのよ」

「だってオマエ、なんかこういうの得意そうじゃん??」

「作れないわよ。私、そっちの才能、限りなくゼロに近いから」

「残念…キミなら絶対できると信じてたのに…」

「知らないわよ!…でもまあ、今は可愛ーい彼女がいるわけだし?
こんな過去のこととは忘れて、今の心情を表現しなさい。それになら
…頑張つてメロディを作つてやらないこともない」

「幽霊と付(憑)き合ってる人間の心情なんか…全然心に沁みない
じゃないか!そんなもの書いたって…」

「ん?じゃ、明日のデートは黄泉の国ということだよーしいのかえ
?」

「ごめんなさい書きます書かせていただきます姉さんお姉さま……;
」

「ここのところ僕は、部屋でこういった非常に緊張感のない感じの
毎日を過している。

傍から見れば独り言をひたすら続けている怪しく哀れな若者だろう。
両親からもたまに変人扱いされる。

フィギュア付き携帯ストラップとちびつた鉛筆の付喪神には笑われる。

しかしまあ、それほど悪くない。

眞実ほくは幽霊にとり憑かれていますわけだが、その幽霊がとびきり明るいし、僕を恨むどころか好いてくれている。

実は僕自身青春時代に、恋の炎に心を焦がされた…なーんていう経験がまったく無くて（じゃああの歌詞は もちろん妄想デス、はい；）、恋愛というものに絶望しかけていたから、相手が幽霊というのはなんとも複雑ではあるが、今やっと成就した！と少なからず…いや、大いに喜んでいる。

逆に、もっと早く彼女に出会っていれば…という思いもある。

そりゃ、人間同士の付き合いのほうで、良いに決まってるからな。

「あ、そうだ。ちよつくら外へ出ませんか、お姉さま」

「いいけど、まーたあのイヤホンに憑かないといけないのー？結構大変なんだからね、私」

「あのイヤホン」というのは木製の耳栓のことで、お出かけの際に詩季美はこれに憑依する。

それを僕が耳につければ、まるでイヤホンで音楽を聴くように詩季美の声を聞くことができる。

詩季美の力で僕の頭の中は彼女の異界になるが、二つのものに同時に憑くことはできないので、彼女は力を二つに分散させて耳栓と僕につかまる（これが結構大変らしい）。

だから僕は彼女に意識を乗っ取られずにすむ。

僕の頭は詩季美と一部繋がっているわけだから、なんと僕は頭の中で考えるだけで彼女に意思を伝えることができるのだ。

よってブツブツ独り言を言いながら歩くアブない若者にならずにすむのである。

漫画みたいにテレパシーが使えるればこんなことはする必要もないのだが、現実はその甘くはないのである。

(「うぐぐぐぐ…マジつらい。ねー真実^{まみ}ちゃん、やっぱこれやめな
ーい?」)

(「僕はMAMIちゃんではありませんえーん。てか、他に僕が『哀れな独り言を言う若者』にならない方法がおりなのか?」)

(「ないわよ。でもこのやり方もないわよ…。どんだけ私が苦勞してると思っ…あれ?」)

(「む?!何者かの異界に入ったようだ。初めての感覚だ。ん?」)

気付けば、頭のとっぺんの髪をリボンで結んでいる女の子が前を歩いている。

はて、あんな子歩いてたかな。

派手な着物を着ており、まさに夏祭りスタイル。

というか、この怪異参の時期設定は10月なんだが。

と、その子は急に立ち止まり、振り返ってこちらを見た。

か、可愛い…黒くて大きな瞳…まるで吸い込まそ…。

「真実!気をつけて。あいつ妖怪よ。見惚れてる場合じゃないわよ馬鹿」

む！わ、わかってるわ！くそー、こちらの思っていることは詩季美に筒抜けなんだった。

意外と不便だなこりゃ（今頃気付くなよ）。

「火を貸せ」

…え？

黒い瞳の着物姿の女の子が、唐突に言葉を発した。

よく見ると、腰に巻いた可愛い帯にタバコの箱が挟まっている。妖怪だから子供…じゃないのかもしれないけど、タバコって…しかも火を貸せて…オヤジみたいなやつだな。

「え、ええとね」

「火を貸せ！」

オヤジ娘が声を大きくして繰り返す。

「あのね、持ってないよ。僕タバコ吸わないから。悪いね」

「火を貸せ！！」

三度目。コイツ聞いてねー…。

「あのねキミ、いいかげんにしないと…」

そう言いながら彼女の小さな肩に触れた瞬間、天地が逆転した。と同時に背中に痛みが走った。

気付けば自分は道の真ん中で倒れている。

何だ？一体何が起こった？

「ん、しぶといヤツね」

女の子は僕の顔を見下ろしながらそうつぶやいた。

よく見るとさっきまで真っ黒だった瞳が、今度は炎のように紅く光っている。

そして彼女は僕の胸に手をかざした。

殺すつもりか。

するとポン！という音とともに僕の耳から耳栓が抜け、詩季美参上！

でも残念ながらカツコいい登場とはいえないなあ。

「私が相手よ、妖怪『火を貸せ』」

妖怪『火を貸せ』？まんまじゃねーか。

というか、そんな妖怪を聞いたことがなかった。

勉強不足だなこりゃ。

「む？あんたも妖怪か？なんでこいつの耳の穴から出てきた？そんなやついたかな。変わった妖怪だな」

まともな妖怪の方が少ない気もするが。

僕はそう思いながら、ゆつくりと起き上がった。つたく、背中がまだ痛いし。

「うるさいわね、あたしだって好きで耳の中にいたわけじゃないわよ！」

「耳の妖怪さん。あんた、火を貸してくれる？」

いちいち話を聞かんヤツだな。

「おいこら、人の話聞きなさいよ。…まあいいや。火だったら『狐火』や『天火』に借りなさい。タバコ持っててライター持ってないつてのがそもそもおかしいけど。まだコイツに危害を加えようつてなら、容赦しないわよ」

「ライターなんか持ってたら、火を貸せって言えないだろ。それじゃボクの妖怪としての存在意義がなくなる」

後で調べたことだが、道を歩いていると、前を歩いている女の子が「火を貸せ」と言う。

これに抵抗すると逆にこちらが気絶させられてしまうという。これがあいつの、妖怪としての存在意義らしい。

その正体は神の子ではないか、というが、こいつが？

…なんか僕だけしゃべってないのも面白くないので、話に加わる。

「じゃ、もし僕がライター持ってて、おまえに火を貸したとしたら、どうしたんだ？」

「『お前も一服どうだ』という」

おい。

「…おっと、こうしちゃいられない。ボクには用があるんだった。残念ながら君たちにこれ以上かまってはいられないのだ。一応今月もボクの存在は示せたし、ではそろそろ…」

ずいぶんと勝手だな…。

それに今月はって、毎月こんなことやってんのか。

「人をひどい目に遭わせておいて、そりゃないだろ。用って何なんだ。それぐらい教えるよ」

「うーむ、仕方ないねえ。東北の岩手のある妖怪と待ち合わせてる

んだよ。向こうは昨日の夜中にこちらに着いたらしいが、用があったみたいだね。今日会うことになったのさ。

「へえ…。妖怪でも友達と待ち合わせしたりするんだな」

「友達じゃない。こちらが仲良くしてやってるだけだ」

「は？じゃ何で待ち合わせなんか」

「助けを求めてきた。何かやらかしたらしい。どうせ痴漢か何かだろう。やつは変態なんだ」

お前も十分変態（変わっているという意味）だ、と言いそうになつて、やめた。

「最初はボクがあいつに呼ばれたんだ。何かしらんが助けてほしいから来てほしいと。でも馬鹿野郎用があるのはためーだろ、ためーが来い、といつてやつたら、あいつはシブシブわかったと言って、こちらで会うことになった。だから友達じゃないんだ、わかったか」

わかったわかった。

「しかしボクが思うに、昨日の夜の用事というのも、どうせ変態関係のことだろーな。それがあいつの存在意義だし。あーもうやんなつちやつたな。会つてのやめようかな」

「おまえ…約束したのにそれはないだろ。というか、変態なことが
そいつの存在意義なのかよ…」

同情はしないが、なんて悲しいやつなんだろう…。

「おいこらお前ら。私はほったらかしか」

やば。

気付けば詩季美姉さんが空中を浮遊しながら、恐ろしい形相でこちらを睨んでいるではないか。

「で、その相手は何て妖怪なの？」

「狸だよ。変態狸」

ヘンタイダヌキという妖怪なのか???まさか。

「やつの名前は『シタガラゴンボコ』。岩手の言葉で『下川原の口
クデナシ』という意味らしいよ。あは、そのまーんま。ぴったし」

オヤジ娘はタバコの箱を手で弄び、笑いながら言った。
そのまんまな名前のお前が言うな。

「その妖怪なら聞いたことがあるぞ。お前がそいつを変態といった意味がようやくわかった。しかしそういう意味だったのか。名前までそんなとは、本格的に悲しいやつかも」

「シタガラゴンボコ」。

この何ともいえない変わった名前の妖怪は、実は狸の妖怪である。スモーカー(?)「火を貸せ」が「下河原」と言ったように、川に出現する妖怪だ。

その特徴は実にお下品で、夜に男が川で立ち小便をしていると、怪しい手を伸ばして陰部を撫でてくるという。これは変態以外のナニモノでもないな。

「で?その変態狸とはどこで待ち合わせしてるの?」

詩季美は何か楽しそうである。

「ええと…って、おい幽霊!なんでそこまで教えなくちゃならん?…まさかお前、来るつもりか…?」

「ダメ?」

「ダメだダメだ!ただでさえアホ狸に付き合っただ変だつてーのに、これ以上面倒事は増やしたくない。第一ボクは『幽霊』つつうヤカラが嫌いなん…」

今度はアホか。
ものすごい言われようだぞ狸君。

「面倒とは何よ。私たちはあなたに協力してあげようと思っているのに。ねえ真実？」

私たちって。

「僕は『火を貸せ』の面倒事を増やしてあげないようにしよう!と思うてる。つまり僕は…」

「おお、協力してくれるのか。すまないな。やっぱり『幽霊』とその生前の姿である『人間』てのはすばらしいな。実はな。ボクは前から『幽霊』ってやつらが好きで…」

お前は一体何なんだ。
…その前に話を聞け。

「こんな楽しそうなことを黙って見過ごすわけ？真実、あんたも行くの。いいわね」

そう言いながら、詩季美は僕にとり憑いてくる。

あの、…僕の話聞いてくれる方はいらっしやらないのですか？
ねえ。

…いないか。
もういいや。
好きにしてくれ…うぐぐ…ぐえ。

5 .

「…ん」

気がつくところこそは隣町の公園の中だった。

そう、僕は詩季美に無理やり連れてこられたのだ。

ちくしょー、とり憑かれても操られずにすむ方法は無いものか…。

「あれ？あのクソ狸いないし。つたく、依頼人が遅れてくるなんてこりゃうーんと仕置きをしなければならんな」

クソって…。

妖怪といえども日本の女の子なんだからもつとオシトヤカに…、せめてフツーに振舞ってほしいと思う。

「ちえー。待つしかないか。よし、待ってる間に変態狸をどうイジってやるつか考えとこ」

そう言う詩季美はとても楽しそうだ。

とても協力する気があるとは思えないのだが。

「ちよつとトイレに行つてくる」

「尿意にようい、ドンツ！…な、なんだよシラけてないでさっさと行ってこいよ」

…そんなに行きたいわけでもなかったが（いや、『火を貸せ』がアホな言葉で空気を凍りつかせたせいで、多少行きたくなくなったかもしれない）、僕はDS妖怪たちからできるだけ離れて、しばらく一人になりたかった。

詩季美に憑かれたせいで気分も悪いし。

それにしても広くて綺麗な公園だ。

遊具はもちろん野球場やテニスコートまである。

こんな公園、僕の町にはない。森林も豊かで、紅葉（黄葉）が見事である。

しかしトイレはどこにあるんだ。

と、端っこの方に、小さい建物が見えた。

やっと思つけた。

ん、まさかこの公園、トイレはここだけか。

これはいくらなんでも…。

野球場やテニスコートから離れすぎである。

小さいほうだったら、向かっているうちにする気も失せるな。

大きいほうは、もはや自分との戦いだな。

えーっ…下品な話をしてすみませんでした。

「はー…ここは静かでいいな…。清潔感があるのもいい」

そう言いながら、僕は社会の窓を開けて構えた。

「残念だなあ。お前さえいなければ、このトイレは完璧なのに」

「はうッ」

次の瞬間、僕の手には毛むくじらのいやらしい手が握られていた。そしてこの狭い空間の中に、下品な叫び声が響いた。

「な…な…」

「気付かないでも思ったか」

捕まえた手を手繰り寄せていくと、50cmくらいの葉っぱの塊が引き寄せられてきた。よく見ると、後のほうに尻尾のようなものが付いている。

「相手が悪かったね、『シタガラゴンボコ』君」

「…完全に気配を消していたのに…あんた一体?？」

「ダテにいろいろな妖怪と付き合ってきたわけじゃない。キミ達の『異界』の空気は体中に染み付いてるんだ」

「…きつとそれだけじゃないスよね」

「ふん、何を知ったように。ほら行くぞ。お前を待ってる妖怪がいるんだ。お前より恐ろしい妖怪がな」

僕はシタガ（以下略）のヤラしい腕を引っ張って、彼女たちの待つところへ向かった。

そんなに強く引っ張っているわけでもないのに、痛いっスよーやさしくしてくださいよーとかうるさい。

…どーもこいつは好きになれそうもないタイプだ。

戻ってくると、彼女たちはやったらでかい声で雑談に花を咲かせていた。

…何で今ミニ四駆の話題なんだ、古いだろあんたら。

「おーい、待たせたな。ほら、こいつを見る。『火を貸せ』、お前が待ち合わせてた…」

「火を貸せの姉^{あね}さん、試してみました」

「お、そうか。どうだった？言ったとおりだったろ？」

「はい、驚きました」

は？

何言ってるんだ???

連れてきたのは真実^{まこと}だぞ???

それに試した?????

言ったとおり???????

何の話だ???????

「まあ、ゴンボ狸の報告は後にして」

困惑している僕をヨソに、『火を貸せ』は落ち着き払って言った。

「いや、悪かったな。本当に用があるのはお前なんだよ、真実」

「…どついついごとなの?」

詩季美が怪訝そうに訊いた。

「そうだな、単刀直入に言おう。真実、お前を狙っているヤツがいる」

「は?」

「正確に言つと、真実さんの力を狙っているんす」

ゴンボ狸は、僕の股間を弄りながら言った。蹴

あう……

「わけがわからん。僕にそんな狙われるような力はないよ。まったく『火を貸せ』さんよ、会ったはじめは僕たちが関わることを嫌がってたくせに。ありゃ芝居だったのか」

「もちろん。妖怪は人間を騙すことくらいお手の物なのだよ。というか、ありゃ幽霊ちゃんのほうの興味を惹くための芝居だったんだがな。幽霊ちゃんの力も必要だし。それに、真実。お前自身気付いていないようだが、お前の身体は常人をはるかに超える霊力をもってるんだぞ」

「そうなんスよ。恐ろしいヤツが真実サンの霊力を狙って…あうッ
！！」

「いいかげん触るな変態」

『火を貸せ』の話によると、ある恐ろしい妖怪が、霊力の高い人間を襲ってはその力を奪っているのだという。そして次は僕の番だというわけだ。つたく、どんどん厄介なことに巻き込まれていくなあ。

「ボクが得た情報では、そいつはすでにとんでもない力を蓄えているそうだ。ボクやゴンボ狸だけでは太刀打ちできないだろうから、それなりに強い妖怪たちをここに呼んでるんだ。おーい、みんな」

彼女がそう叫ぶと、何やら怪しいヤツらがぞろぞろと（）といっても三人だけ（）闇の中から現れた。

「紹介しよう。右から『狂骨』『おとら狐』『ふらり火』だ」

「あんたが真実さんか。よろしくな」

そう言ってきたのは『狂骨』というボサボサ銀髪の男の妖怪だ。幽霊に似た姿で足がなく、ドクロのネックレスを首にしている。悔しいかなイケメンの顔で、右目には小さなドクロが埋め込まれており、そこから真っ赤に光る目がこちらを覗いていた。

「個人的に『火を貸せ』には借りがあるし、話の中の恐ろしい妖怪ってのはちょっとした知り合いでな。気に食わねえヤツなんだよ」

「気に食わないし、かなり危険なヤツなのですよ。野放しにしておいてはいけない」

『おとら狐』が真剣な顔つきで言った。

この妖怪は左目を失っている隻眼の狐である。よくみると左足を両方とも失っており、半ば浮遊していた。

「ヤツは人間も妖怪も恐怖で支配しようとしてるんです。時代錯誤も甚だしい」

「そう、放ってはおけない」

『ふらり火』という、炎をまとった鳥の妖怪が賛同した。

「ちよつとちよつと、ヤツヤツつてさっきから言ってるけど、一体
どういふ妖怪なのよ」

詩季美は抑えきれないといった様子で言った。

「ヤツは御玉つていう化怪猫でな、人間に化けて悪さを働いている
妖怪だ。ちよつと前まではパツとしないヤツだったのに、近頃メキ
メキと力をつけてきやがった。指名手配にまでなつてたぜ。これだ。」

そう言いながら、『狂骨』は懐から一枚の紙を取り出して見せた。

「あ」

詩季美と僕は同時に叫んだ。
見覚えのある顔だったからである。

「この指名手配見たことある！何？こいつがその危ない妖怪なの？
？そんな感じには見えないなあ……」

詩季美がそう思うのも当然だと思った。

確かに少し意地の悪そうな雰囲気もあるが、基本的に普通の、いや、
奇麗な女の子である。

その娘が男を強請っているというのだから、恐ろしいものだ。
ある意味妖怪より怖い。

あ、この娘は妖怪なんだっけか。

ところで、詩季美は僕と知り合う以前に、この指名手配を幽霊仲間とともに見たそうである。

その時はただの一妖怪の指名手配に過ぎないと思ったそうだ。

しかしこの顔は…。

「確かこんな顔の女性を見かけたことがあったよ。結構前のことなのに、こんなに覚えているのが不思議だ」

「え？どこで？？あんた見たことあんの？？？もー、どーして教えてくれなかったのよ」

「指名手配犯だとは知らなかったんだよ。なんとなく化け物という感じはしたけど。##市の繁華街だよ、確かな。」

「あんたがヤツをいつ見たか知らんが、その時にヤツはきつとあんなの霊的な力を感じ取ったはずだ。そして必ず力を奪いに来る」

『狂骨』が真剣な顔つきで言った。

マジですか。

そしてすかさず『おとら狐』が付け足す。

「ヤツに強請られた男たちは、あり得ないほど心が衰弱していたそうです。おそらく精気ちからを奪われたと考えられます。ですが、真実さ
んという大物を見つけたとなれば、必ず狙って来ましょう。ちまち

まと力を奪うよりも効率的ですからね」

「なら何でなかなか襲って来ないのかしら。気づいてないんじゃないの？」

詩季美はこの妖怪たちの話に合点がいかないようである。僕だってよくわからない。

「メインディッシュは最後に取っておこうとしとるのかもな」

『火を貸せ』が恐ろしいことを言った。
やめてくれ。

「まあ、俺たちはそれを阻止するために集まったんだから。なあ狐？」

「ええ、そうですよ骨さん。妖怪にだって秩序はあるんです。私だって極力憑依することを控えているのに、まあ堂々と悪事を働いた上に、人間を脅かすための力を蓄えていようとは」

「人間に化けて現代社会に順応していたようだが、その糸が切れたのか。妖怪は昔の様に好き勝手気ままに振舞うことはできない。時代の流れについていけぬ物の怪は消えてゆくしかないのだ。もし今の世を妖怪の天下にしようとなら、時代錯誤もいところだ」

『ふらり火』はそう言つと、大きくため息をついた。
見かけによらず冷静で落ち着いている。
こんな妖怪もいるんだな。

「まあこれからしばらくあなたの近くいさせてもらつぜ。もういつ襲つてきてもおかしくないつばいからな」

そう言いながら、『狂骨』は僕の背中を軽く叩いた。

「ああ、ありがとう。まだ頭の中が整理できてないけど、何だか恐ろしいことに巻き込まれたらしいということにはわかった。さすがにまだ死ぬわけにはいかないしな…ほんと、頼みます」

もうあたりは真つ暗になっていたので、僕は彼らを家に招待することにした。

両親は旅行に行つてて3日間帰つてこないし、こちらも守つてもらふばかりじゃ悪いから、何かご馳走してやろうと思つたのだ。

え？お前料理つくれるのかつて？

もちろんさ！（詩季美が憑依して僕の身体を使つてつくるんだけどね）

そんなわけで僕は、今妖怪達を連れて家に向かっている。

「マジで???ご馳走してくれんの?あーりがとーう!あ、俺一応幽霊の類だけど実体化できつから。なーんでもいいぜー」

「それはどうも。私は雑食ですので、何でも結構です」

「せっかくのご好意なのにすまないが、私は火しか食すことができない故…」

「ボクはライスカレーしか食べないからね」

それぞれ『狂骨』『おとら狐』『ふらり火』『火を貸せ』の台詞である。

『ふらり火』さんには蝋燭に火を灯せばいいのだろうか。庭でファイヤー起こすわけにもいかないもんな…。

『火を貸せ』にはレトルトでもくれてやるか。

「喉が渴いたな…ちよつと買ってくるぞ」

脇道に自動販売機が見えたので、僕はお茶でも買おうと向かった。残念ながらお茶系は売り切れていたの、しかたなく炭酸ジュースを買って急いで戻る。すると…。

「うがつー!」

何かにぶつかって、僕は尻もちをついた。
…と思ったが、前方には何も無い。

「いてて…」

何だ？何が起こった？
今度はゆっくりと前へ歩み出してみる。

「ん？」

額のあたりに何かがぶつかった。
おそろおそろ手を前に伸ばしてみると…。

「何だこれ…」

額のまわりだけではなかった。
見えない壁のような何かが立ちはだかっているかのように、それ以上前に進めないのである。

「こつこつという妖怪っていたよな…。まさか」

「真実さん、危ない！」

突然『おとら狐』の聲がした。
慌ててしゃがむと、何かが見えない壁にぶつかった。

「ちっ」

背後で邪悪な舌打ちが聞こえた。

「俺の能力で空間に壁を作った。お前はもう逃げられないぜ」

「誰だお前は…」

「進路妨害型の怪異さ。俺は『野衾』のびすまと呼ばれてる」

「あ、そう…ほんと俺はようけ妖怪に出くわすな…」

「それはお前が特別な人間だからだろうな。御玉猫という化怪猫がお前に会いたいと行っている。ご同行願おうか」

「ふう…そういうことか。残念だけど、これからちょっと用事があるんで…」

そう言いながら、僕は買ったばかりの炭酸ジュースのキャップを外し、一口飲んだ。

「そんじゃ」

『野衾』とやらに会釈すると、僕はみんなが待っている所へと向かった。

「え?... な... 俺の、俺の壁が消えてるだ?... 馬鹿な...!」

「残念。さすが、あのお方はお前の対処法をご存知だったようですね。『野衾』や『塗壁』^{ぬりかべ}などの進路妨害型の妖怪の力は、一服して心を落ち着けることで無効化することができる。人間の恐れる心こそが、お前の異界の力の源ですからね」

「『おとら狐』! いつの間に俺の中へ... ぐ、ぐああ」

「痛いでしょう? 私に憑依された者は左眼と左足が痛むのです。私が生前に受けた痛みです。じっくりと味わいなさい!」

「あ、あがが」

「楽になりたければ、もうあの方に手出しをしないことですね」

「ぐ、ぐぐ。あ、甘いな。こうなることは計算の内だ。俺は足止めに過ぎん。今頃あいつらは... ヒヒヒ」

「何ですって? 馬鹿な! とか言ってたくせに。このツ! 強がり止めなさい!」

「ぐえ」

『おとら狐』にとり憑かれた『野衾』は、とうとう気を失ってしまった。

さんざん痛めつけられた左眼からは目脂がポロポロとあふれ、左足は電気が走ったようにピーンと伸びている。
あらら、これはカツコ悪い……

9 .

「『おとら狐』はうまく片付けてくれたかな？」

「心配ないだろう。しかし『野衾』のぶすまも大胆というか、無謀なことをするやつだ」

『狂骨』と『ふらり火』はとても落ち着いた様子だった。
きつと彼らも、恐ろしい力を持っているに違いないだろう。
今までのいろいろな妖怪に遭遇してきた僕だからわかることだが、彼らは雰囲気違った。

「ところで、『シタガラゴンボコ』はどこへ行ったんだ？」

『狂骨』がふと思い出したように言った。
そう言えば。

「ゴンボ狸には情報と援軍集めを頼んだ。知り合いの狸や、その他

変態妖怪仲間が意外と多いからな、あいつ」

『火を貸せ』がとても偉そうにいった。

何だ、ゴンボ狸はお前のパシリか。

「さすが、変態行為を全国展開し始めただけのことはある」

「あいつは変態の中の変態だな」

むちゃくちゃ言ってる。

…やはり妖怪って恐ろしいな。

「…しかし相手側にもなかなか強力な妖怪がいらっしやるようで、かなり強い気配が二つ」

「そつだな。とうとうこの『狂骨』の力を披露する瞬間がやってきたか」

『ふらり火』と『狂骨』がそう言ったと同時に、前方に禍々しい気配が広がった。

「とうとうお出ましか。『ふたくちめんな二口女』よ」

「ふん。人間のお守りをするようになったなんて、『狂骨』も堕ち

たものね」

ガラスの悪い声とともに、声の雰囲気そのまの女の子が出てきた。『野衾』の彼女、といっても全く違和感がないくらい、よく似ている。

この『二口女』と呼ばれる妖怪は、どうやら『狂骨』と顔見知りのようだった。

「今俺、京都で墓守をしているんだ。墓地にはかなりの幽霊が居残ってるんでね。そいつらのお守りをしなくちゃならない。守ることが、俺の仕事なんで」

「暇人。それより妖怪の世界を広げるといって、将来性のあることをしよーよ。ねえ？『安義橋あぎのはし？』」

『二口女』がそう言うと、彼女の背後から平安美人があらわれた。

「ほんまにその通りや。この世界には人間が多すぎます。ちょっとくらい減ってもらっても、かまへんのとちやいますか」

悪意に満ちたオーラが周囲を包む。
恐ろしいことを言っやつだ。

「面倒だけど、やるしかなさそーね」

「そうだ。ガムなんか噛んどらんとさっさと来んかい」

「ぺっ（吐き出した）！言われなくてもやってやるよ骨野郎」

『二口女』は目を光らせ、さらに束ねられていた髪の毛をバサバサと振りほどいた。

そして後ろを向いて後頭部から、大人一人を丸呑みできそうなくらい大きな口を開いた。

すると腰のポーチからチョコレートを取り出し、箱ごとその口へ放り込んだ。

どうやらすぐに口がさびしくなるようだ。

でも箱ごと食ったら…あ、やっぱり吐き出した。

「相変わらずお下品な口なこと」

（普通の）人間ならば気絶してしまいそうなこの光景を、『狂骨』はサラッとこう言っただけだ。

「さてと、こちらも久々に暴れさせていただきますか」

『狂骨』はそういうと、髑髏の首飾りを外し、頭上に放り投げた。すると、髑髏のビーズは空中ではらばらに飛び散り、それぞれが青白く光り始めた。

それと同じ光を、彼自身の体も発してる。

幽霊特有の、途中で消えている足も徐々に実体化していき、モデルも顔負けの美脚が現れた。
長い。

ふと自分の足を見る。
敗北。

「しゃぶってやるよ、骨野郎」

「タバコ吸うか食うかどっちかにしろデカ口女」

え、タバコ？あ、ほんとだ。

良く見ると後ろの（人間と同じところについている）口でタバコを吸っている。
忙しいやっちな。

こうして骨と口の奇妙な戦いが始まった。

「ぼっっ」

『ふらり火』が『安義橋』あきのはしに向かって火を吹いた。

ぎよ、いつのまにあの京女（狂女のほう）が正しい（こちらに近づいたんだ？）

全く気配を感じなかった。

「気を取られてはいけなぞ真実。ヤツは食人鬼。隙を見せたら終わりなのだ」

「邪魔しはるなんてひどいわあ」

「化怪猫に献上するんじゃないのか？」

「あの方がお望みなんは、その人間の霊力どす。腕一本くらいならもろてもかまへんと言われているからええんどすえ」

なんか舞妓はん混じってきたな。

「耳障りなその言葉遣いを止める。貴様が鬼だということはわかっておるんだ」

僕も現れた時から鬼らしい雰囲気を感じていたが、『安義橋』という名前を聞いて確信した。

昔、近江国（現在の滋賀県）に安義橋という、渡り切った者は誰もいないという橋があった。

いつの時代でも口が達者なヤツはいるもので、ある男が自分なら渡り切ってみせると自信たつぷりに語った。

その男が馬でその橋を渡ると、橋の真ん中らへんで一人の美女と出会う。

この女の正体は鬼で、男はこの鬼に襲われることになるが、なんとか橋を渡り切って助かった。

しかし時が経ち、男の屋敷に度々現れて怪異をなした。そして男の兄弟に化けて油断させて屋敷に入り、最後には男の首を持っていく

のである。

これは日本最古の古代説話集である『今昔物語集』の話である。12世紀につくられた物語集に出てくる化け物が、今自分の目の前にいるということだ。

「あー、面倒だ。ずっと女に化けていると息が詰まる。さっさと腕をいただくか。ほんとは首がいいんだけどな」

女の口調が突然変わる。

すると、長い黒髪がボサボサと立ち、顔は徐々に崩れて一つ目と大きな口が現れた。

さっきまで人間と同じだった手も、鎌のように大きな爪が三本ついた鬼の手に変化している。

これが正体…。

「その前にお前を丸焼きにするとしよう」

『ふらり火』は大きく息を吸い込む。

そして…。

「喰らえ、『炎縛獄』」

口から吐き出された炎が、『安義橋鬼』を縛り上げるように襲いかかった。

「ぎえっ、熱い熱い熱い苦しい苦しい!!…なんちゃって」

「何っ?!」

鬼の一つ目が強く光ったと思った瞬間、僕と『ふらり火』は数メートル先に吹き飛ばされた。

「こんな程度の攻撃では意味がない」

「…くっ!」

「キミは戦闘が苦手だな、違うか」

「…」

「まあ、おどかすだけの妖怪に、戦闘能力があるわけないか、あははは」

「ふん…確かに私は強くない。だが、私の力はじわじわと効くんのだ。ほら、お前が受けたわずかな火傷…」

「な…か、体が熱く…」

「私の異界の力はここに薄く張り巡らされている。それが傷口を侵していくんだ。どうだ、苦しいだろう」

「ぎぎ…キツ…！」

また鬼の目が光った。

それと同時に、鬼は凄まじい勢いでこちらにむかって突進してきた。

『ふらり火』はそれをまともに喰らい、吹き消されてしまった。

「おおおお、熱い…熱い…でも邪魔者は消えた。その腕をもらうぜ」

うわ、やめてくれ。

こんな腕、絶対不味いつて腹壊すつて。

わ、よ、寄るな。

(熱い)

「熱いなら水をやるつか？」

「ん？…あが、がぶがぶ…」

『火を貸せ』？

ヤツが、鬼が僕を食べようとして開けた大きな口に、自らが発生させた水の球を押し込んだ。

「『しんすいばくだん神水爆弾』」

「うががが…」

鬼が苦しそうに口を膨らませる。飲み込んだ水が体の中で膨張しているのだ。

吐き出せばいいのだが、それはできない。

(後で聞いたが) 『火を貸せ』が鬼の口を異界の力で塞いでいる(らしい)のである。

とうとう鬼は真ん丸い風船のようになり、大きな音を立てて破裂してしまった。

「これでよしと」

「これでよしって…横から入ってきて…」

「何だ？何か問題でもあるのか？フェアじゃないと言いたいのなら、それはおかしいぞ。目的は、お前の力を奪われないようにすることだ。チャンスは逃してはいけない。それに『ふらり火』は圧されてたし」

「悪かったな、弱くて」

飛び散った火が集まってきて、再び鳥の形となった。弱いとか言っているが、不死身じゃないのか彼は。

「頭が無事なら再生できるんだ」

火の鳥は僕の思っていることを見透かしたように言った。

「鬼のヤロウも多分死んじやいないよ」

「え？」

「鬼も頭さえあれば力は使えるからな。体は吹っ飛んだが頭がダメだった」

「どーすんだよまた来たら」

「大丈夫だろう。ヤツの広げた異界が徐々に遠ざかっていく。逃げるつもりだ」

…確かに、鬼の禍々しい雰囲気はもう感じないが…。
僕は鬼を瞬殺（生きてるらしいけど）したこの童女の言葉を信じるしかなかった。

「…ところでお前、ずいぶん強いんだな。『火を貸せ』なのに水を使うってところが意外だったが」

「意外でも何でもない。それはボクの一特徴に過ぎないし。ボクは河童の一族だから、使えて当然なのだ」

え？そうなの？

正体が神の子って…そういうことなのか。

「それより、あちらでは骨幽霊と大口姉ちゃんの戦いが熱いねえ」

熱い…というより、凄い事になっていた。
彼らの周りの空気が、異常なほど揺れているのを感じた。

「『骨衝打』！(巨大な骨で、『二口女』を打ちつけている)」

「『魂喰い(たまぐい)』！(『狂骨』に後頭部の口を伸ばして噛みついてる。どうやら、エネルギーを吸い取る技のよう)」

互いに技を繰り出し、それを受けたりかわしたりで見てるほうも忙しい。

しかし、たまにカンフーみたいな立ち振る舞いになったりして、結構面白かったり(戦ってもらってるのに、申し訳ない)。

「はあはあ…やっぱり互角の力を持つてると体力の削りあいになるぜ…」

「互角？悪いけど、あたしまだ本気出してないわよ」

「え、マジで？」

「出してあげようか？」

女が不敵な笑みを浮かべた。
すると凄まじい勢いで突進し、『狂骨』を蹴り上げた。
疾い！

「がっ！」

「『ボンバーシャウト爆碎咆哮』」

すかさず女は技を撃ち込む。

そのでかい口から何やら巨大な波動のようなものを、『狂骨』に向
かって撃ち出した。

『狂骨』はそれをまともに喰らい、遠くまで吹き飛ばされてしまっ
た。

「『狂骨』！」

『ふらり火』が叫んだ。

「…やはり強いな」

『火を貸せ』が口惜しそうに唇を噛む。

これは…やばそうだ。
くそ…何とかしたいが、僕にはそんな力はない。
どうする…どうすれば。

「あはは、終わった終わった。さてと、その人間をいただくとするか」

…ここまでか。

「そうはさせないわよ」

「し、詩季美？」

突然、僕の背後から詩季美が現れ、迫っていた『二口女』の口を弾き飛ばした。

「痛っ。ち、ずっと後ろのほうに隠れていたかと思えば。鬱陶しい女だね。今すぐ消してやるよ」

「詩季美！もういい、止める。何で関係の無いお前らが傷つく必要がある？…おい口女。御玉猫とやらに、僕は会えばいいんだろ」

「んー、会うだけじゃダメよ。猫の餌になってもらわなきゃ。そして私の餌にもね。ホントは頭がいいんだけど、両足で勘弁してあげる。では、いただきますー」

「俺も両足だけで勘弁してやるよ」

「はっ？」

女の両足が碎け散る。

崩れ落ちた女の向こう側には、左手を失い、幽霊の足に戻った『狂骨』がいた！

無事…とはいえないけど、無事でよかった…。

「ぎゃああ…この…骨野郎おお！！！！」

「油断し過ぎなんだよアホ」

「があああああ！」

最後の力を振り絞り、女は『狂骨』目がけて口を伸ばした。

「『狂焦獄』…はっ！」

女は一瞬にして青白い炎に包まれた。

そして、苦しみ悶えながら消えていった。

「『狂骨』…大丈夫か…」

「なあに、俺は幽霊だ。これ以上死にやしねえって。この腕だって、ほらこの通り」

千切れた左腕が、一瞬にして元に戻った。

「もつとも、魂を完全に消滅させられると、死ぬっつーか消えちまうがな」

そう言っつて、彼は右目の鬍髯を指差した。

「何で何の関係も無い僕のためにここまで…。そりゃ、化怪猫に僕が喰われたら世界がやばいのはわかるけど、まずは自分の命だろ」

「…あんたさ、さっき私のこと関係ないって言ったよね」

「え？」

「詩季美ちゃんはあなたの彼氏じゃなかったの？」

「…」

「女の子に守られるのは男として嫌かもしれないけど、私にはあなたを守る義務があるんだからね。だって、私はあなたの守護霊なんだから」

「詩季美…ごめん…間違ってたよ。…ありがとう…みんな、ありがとう」

「ま、俺はあのでか口女に借りがあったからそれを返したただけだからさ。そう気にすんなよ」

「ボクも久々に暴れられて楽しかったかなー。『ふらり火』はお疲れさん」

「ふん。あれが私の戦略なのだ」

…馬鹿だな。

僕は、妖怪のことを知った気になって、本当は何も知らなかったんだな。

今回の出来事で、それが身に染みてわかった。

今自分がやるべきことは、もっと妖怪について知ることだ。

そして、退魔師とまではいかないまでも、もっと自分で自分の身は守れるようにしなければならぬ。

それが、妖怪・霊が見える者の宿命なのだろう…。

10 .

「ふふふ、『あなたは人間が嫌い』だ」

「…何？」

「『あなたはそんな人間がはびこるこの世界を変えよう』と
思っている」

「…」

「『だがそんな力は自分には無い』と思っている」

「…やめろ」

「『こいつは一体何者だ？』…ですか。ごもつともな疑問です。突
然妙なことを言って失礼しました。しかしあなたは今、私が誰なの
か、少し見当がついたようですね」

「…おまえが他人の心の中を見通すことができるという妖怪^{あやかし}、
『覚^{さつ}』
か」

「その通りです。そして、あなたと同じ理想を持つ者です」

「ほっ」

「その強い心の声を聞いた時、是非あなたの力になりたいと思いま

した」

「では、ご協力願おう。ともに妖怪が自由に暮らせる理想郷を創り上げよう」

「ええ、必ず成し遂げましょう、御玉猫さん」

我輩は猫である。

名は御玉という。

生まれは江戸時代、もう少し正確にいうと、文久2（1862）年の生まれである。

もちろん初めは、普通の猫としてこの世に生を受けた。

江戸の町にある魚屋を脅かす、最強泥棒猫軍団の一員として名を馳せて…はいないが、まあ頑張って生きていた。

決して生活は楽ではなかったが、それなりに楽しかった。

埃やら泥やらにいつも塗れていても、兄弟や仲間たちが助け合う姿は美しかった。

そして、いつしか自分はその中の長になっていた。

泥棒その他の実績を仲間認められたのである。

生れて初めて、上に立つ者の気持ちを知った。

自分には今まで以上の活躍が求められ、すべての部下に目を配らなくてはならない。

僅かでも何か失態をやらかせば、たちまち長の座から引きずり降ろされてしまう。

幸いに、自分にはそういうことは起こらなかった。

ただ、もつと不思議なことが、自分の身には起きていた。

周りの兄弟仲間がどんどん年老いていくのに比べ、自分はほとんど年を取らないのである。

それどころか、急に若返ったような力を得ることもあった。

しかし、それと呼応するように仲間たちはやせ衰え、死んでいった。そして自分は独りきりになった。

今思えば、この頃にはもうすでに化怪猫としての能力が目覚めていたのだらう。

無意識のうちに仲間たちから生命力を奪い、我が物としていたに違いない。

江戸が終わり明治の時代が訪れて、世の中は変わっていった。

自分が「化ける」ことを覚えたのもちょうどその頃である。

そのような、いわゆる妖怪となってしまう自分を愚かだとも恐いとも思わなかった。

むしろ超常的な能力を得た自分に感動し、酔いしれた。

そしてすぐに目標ができた。

さらに上を目指すこと。

つまりはこの世界に我が物顔ではびこる数多の人間どもを凌駕し、従えるということだ。

その前に、徐々に衰退しつつある妖怪の長となって、人間に対抗できるだけの勢力に戻す必要がある。

そのために自分は妖怪となったのだ。

ここは御玉猫勢力本部の男戸香山山頂。なんとかやま

真実たちと二口女らが戦った場所から約10km離れたところにある。

。これ以上の説明はメンドクサイから書かないことにする（おいおい）

「玉さん、どうされました？」

「ん？いや、ちょっと昔のことを思い出していたのだ」

「我々が初めて出会った時のことですか」

「ああ。あれは自分がちょうど100歳と時だったか」

「私はその時ちょうど500歳ですね」

「何でこんな若輩者について来てくれたんだ？」

「私は能力があることはもちろん、確実に信頼のおけるお方でなければ付き従いません。『覚』の能力は、それらを見極めることができるのです。それに」

「それに？」

「あなたに心変わりがあっても、それはこちらに筒抜けです」

「……ははは、それはそうだ。お前には敵わない。わかっている者に言うのもなんだが、安心しろ。自分の心は変わらない。それに、自

分には無いその『覚』の能力が必要なのだ。裏切るはずもない」

「そう言っていただけで『安心』しました。

「御玉猫様！」

「どうした鈴木？」

「徳島より『犬神』様が参っております」

「おお、そうか…ん？」

ふと見ると、鈴木猫の背後に白髪の少年が立っている。

「そなたが『犬神』か？なるほど。我々化怪猫のように変化の能力があるのか」

「化けられないことはないですが、私の主たる能力は憑依ですね」

「この少年は犬神持ちの血筋の人間で、『犬神』を継承させるための依り代（よりしろ：憑依の対象となる人間や物体のこと）です。我々『犬神』は犬神持ちの家系の人間に憑依して生き長らえ、受け継がれてゆくのです」

犬神持ちの家系の人間は霊力が強く、また他人を妬み恨む心の力も相当なものであるらしい。

依り代の心の中が『犬神』の支配する異界であり、恨みの心が強け

れば強いほど『犬神』の力も増していくのである。

「家の中で特にこの少年は妬みの心が強い。失恋をしたことでその強さが顕になりました。人間とは恐ろしいもので」

「その人間を利用するあなた様も十分恐ろしいですよ」

『覚』がもつともなことを言った。

「ところで玉さん、霊能力者を探しに行った『野衾』と『二口女』と『安義橋鬼』は何をやってるんでしような？」

『覚』は苛立っている。

「まだ見つけられていないというのは考えにくいから、きっと霊能力者側についた妖怪にやられたんだろう。まあいい。妖怪同士の戦いは異界の奪い合いだからな。相手を恐れ、相手の異界に取り込まれてしまえば終わりだ。強い妖怪だけが生き残る。本当に強い妖怪だけかな」

「それが化怪猫さん、あんだだというわけか」

背後から、あの今風の若者のいでたちの、進路妨害型妖怪が現れ

た。

そう、『おとら狐』にとり憑かれてボコボコにされた、『野衾』である。

しかし彼はどういっわけかピンピンしている。

「『野衾』！何をやってた！…：そうか。お前もやられたんだな。

『おとら狐』め…：！」

「『名答！いかにもたこにも、私は『おとら狐』です。さすがは『覚』。何もかもお見通しですね」

なんと、『おとら狐』は完全に『野衾』を乗っ取り、彼に成りすましていたのであった。

しかし、心の中を見通してしまう『覚』には無意味である。

「まったく愚かなやつよ。この『覚』にそんな小細工が通用するはずもないのに。もう少し賢い妖怪だと思っていたが、残念ですよ」

「残念がる前に、私の心のもっと奥を覗いてみなさいな。私がここに来た真意を」

「む…：（読み取り中）、な、何と、玉さんのことが好きと！今日はその思いを伝えるために来ただとおお…：！」

「『おとら狐』」

「『御玉猫』」

「…」 『犬神』

『覚』のまさかのボケに、皆凍りついた。
やはり妖怪とは恐ろしいものだ。

「…な、何ですかっ！ 『犬神』！その冷めた目は何だ！あ、玉さん
まで」

「…『犬神』、その客人を丁重にもてなしてさしあげろ。『覚』は
私と一緒に来い。霊能者の力をいただきに行くぞ」

「え？あ、わ、わかりました。…うーん、まだボケる技術はいまい
ちのようだな…自信あったのに…ブツブツ」

御玉猫は『覚』をつれて山を下っていった。

「…追わなくていいのかな？」

『犬神』が不敵な笑みを浮かべながら言った。

「追ってもあなたが邪魔するでしょうに。だったらもう戦っほかな
い」

『おとら狐』は冷静に言葉を返した。

「いつまでも和やかな空気の中にいられると思わないことだな」

誰もあのボケで和んでなどいない。

「そうですね、ならばこの和やかな空間を壊そうとするいけない御犬様を懲らしめてさしあげようか」

1 1 .

「真実^{まみ}、どうした？」

『火を貸せ』のその声は、とてつもなくわざとらしい。

「マミじゃなくて真実^{まこと}だつての！…風が冷たくて寒いんだよ。僕は寒さに（暑さにも）弱いんだ。早いとこ家に入ろう」

「しかしまだ『おとら狐』が戻ってきてない。あいつが『野衾^{あんなやつ}』にやられるはずがない。もう少しだけ待とう」

と『ふらり火』。

そうだな。

助けてもらって置いて置いていくなんて最低だわな。
ちゃんとお礼をしなれば。

…そういえば何かをご馳走する約束だったな。

雑食だから何でもいいと言っていたが、どうしようかな。

そうだ、きつねうどんにしよう！

…いや、やっぱ、他の何かにしよう…（ ちょっとナイスな考えと
思っただろ）。

それにしても…。

「何でこんなにやたら寒いんだ??もしかして僕だけか??」

「いいや真実、俺も感じるぜ。凄まじい悪寒をな…」

『狂骨』がそう口にした瞬間、周りの空気が異常なほど張り詰めた
ものとなった。

妖怪…の気配?

そうだとしても、このような空気は今までに感じたことがない。

何だ?何だこれは?

「とつとつ来たわね、化怪猫め」

詩季美がぼつりとつぶやいた。

しかしその声にはいつもの元気が無かった。

ただでさえ冷たい霊体がそのまま凍ってしまうのではないかと思え
るほど、彼女は緊張していた。

そしてその視線の先には…女の子。

あの指名手配通りの、長い黒髪と端正な顔立ちの女の子が…明るい茶髪に黒が交じった怪しげな男と一緒に立っていた。

「キミだね、常人には無い力を持った人間は」

女の子は堂々とした口調で言った。
その脇で茶黒髪の男が楽しそうに笑う。

「お、その人間！今『こいつは本気でヤバイ』。…』と思
いましたね？その通り！キミは絶体絶命！大ピンチだ」

「彼は『覚』という妖怪だね。心の中を覗き見る能力を持っている。
下手な作戦を立てても全て筒抜けだからね。先に言っておくよ」

『覚』か。

相手の心が読める妖怪が敵側にいたとは。
これはいよいよやばいぞ。

「そういえば自己紹介がまだだったな。私の名は御玉。いわゆる化
怪猫だ。このような女の姿に変化して人間を惑わし、その力を奪^{エネルギ}う。
それが私の能力だ」

『『水通暴走』…！』

突然『火を貸せ』が叫んだ。
と同時に巨大な水の柱が化怪猫に向かって伸びていった。
ふ、不意打ちかよ。
鬼に仕掛けた攻撃といい、ほんとに手段を選ばねえなあ…。

(ん?)

一瞬化怪猫の気配が消えたように感じた。
水の柱は猫に思いつきりぶつかり、激しい飛沫を上げた。
飛沫というか、ほとんどゲリラ豪雨なみの水量で、辺りは一瞬にして水浸しになった。

「…おいおい、まだ自己紹介の途中だぞ。フライング過ぎやしないかい？」

「く…そ…」

『火を貸せ』が口惜しそうに声を上げる。
化怪猫御玉はまったくの無傷であった。
しかも御玉の真正面には、薄っぺらい猫の足跡マークのような形をした光の物体が浮かび上がっていた。

「バ、バリアーかよ…どんだけ凄いなあいつ…」

「あれは『境界壁』だ」

『狂骨』が体を震わせながら言った。
キョウヘキ??

「境壁は人間界と異界の境目のことだ。異界の力が強いと人間界との境界に大きなひずみが生じる。ヤツはそれを防御壁として利用したのさ」

「…そんなことができるのか…」

「ヤツの気配が消えたのを感じただろう? あれは広げていた自分の異界を狭めて、自分の周りに集中させたからだ。しかしこれほど強い境壁を見たことは一度も無いな…。何て力なんだ…」

『火を貸せ』の技を受けとめた化怪猫。

それを見た『狂骨』も『ふらり火』も詩季美も、皆恐怖している。妖怪を見て恐れることは、その妖怪の持つ異界の力に気圧されたからであり、それはすなわち敗北を意味する。妖怪を恐れてはいけないのだ。

数ある日本の妖怪話の中でも、妖怪に打ち勝った人間はその妖怪を恐れていない。

反対に妖怪にやられてしまった人間はその妖怪を恐れてしまい、そのまま餌食になってしまうことが多い。

妖怪同士の戦いでも、それは同じなのである。

いかに相手を恐怖させるかが、勝敗を決定付けるのだ。

相手を恐怖させるのは、とても単純なことである。

相手を超越した力を発揮すればいい。

まさに化怪猫の力は我々を超越しており、誰も動くことすらできない。
負けた。

それは皆その身をもって自覚していた。

「あーあ、びしょ濡れじゃないですか。まったく、水浴びするような季節じゃないでしょうが」

茶黒髪の『覚』がふくれ面で言った。

こいつもさっきの攻撃を避けたのか。

そういえばこいつの異界の力はどうなのだろうか。

いまひとつ気配がつかめない。

こちら側の妖怪に対しての恐れは見る限りでは無さそうだ。

…やはりこいつの力は強いのか？

かといって化怪猫御玉を恐れて従っているという感じでもない。

やつらは強い信頼関係で結ばれているのだろうか。

そういう雰囲気にも見えないな。

いずれにしてもまあ、他人の心を読むようなやつだ。

マジメな妖怪でだけはないだろう。

「さあ玉さん、もうあなたの勝利です。あなたがこの世界の支配者となるのですよー！」

「…さて、反抗する者がおらねば、そうさせてもらおうかな」

ちくしょー…どうすねば…。

「支配者になるのはちと早いかな」

「だ、誰だ…！！」

『火を貸せ』の技を受けとめた化怪猫。

それを見た『狂骨』も『ふらり火』も詩季美も、皆恐怖している。

妖怪を見て恐れることは、その妖怪の持つ異界の力に気圧されたからであり、それはすなわち敗北を意味する。

妖怪を恐れてはいけないのだ。

数ある日本の妖怪話の中でも、妖怪に打ち勝った人間はその妖怪を恐れていない。

反対に妖怪にやられてしまった人間はその妖怪を恐れてしまい、そのまま餌食になってしまうことが多い。

妖怪同士の戦いでも、それは同じなのである。

いかに相手を恐怖させるかが、勝敗を決定付けるのだ。

相手を恐怖させるのは、とても単純なことである。

相手を超越した力を発揮すればいい。

まさに化怪猫の力は我々を超越しており、誰も動くことすらできない。

負けた。

それは皆その身をもって自覚していた。

「あーあ、びしょ濡れじゃないですか。まったく、水浴びするような季節じゃないでしょうが」

茶黒髪の『覚』がふくれ面で言った。

こいつもさっきの攻撃を避けたのか。

そういえばこいつの異界の力はどうなのだろうか。

いまひとつ気配がつかめない。

こちら側の妖怪に対しての恐れは見る限りでは無さそうだ。

…やはりこいつの力は強いのか？

かといって化怪猫御玉を恐れて従っているという感じでもない。

やつらは強い信頼関係で結ばれているのだろうか。

そういう雰囲気にも見えないな。

いずれにしてもまあ、他人の心を読むようなやつだ。

マジメな妖怪でだけはないだろう。

「さあ玉さん、もうあなたの勝利です。あなたがこの世界の支配者となるのですよ！」

「…さて、反抗する者がおらねば、そうさせてもらおうかな」

ちくしょー…どうすれば…。

「支配者になるのはちと早いかな」

「だ、誰だ…!!」『覚』が声を上げた。

振り向くと、僕らの後ろに笠を被った着物姿の…狸？のようなものと、その両サイドに、見るからに河童！というやつらが立っていた。そして狸さんの前には…ゴンボ狸。

「皆さん！遅くなりました！援軍を呼んできましたよー！！」

「『シタガラゴンボコ』よ、ワシのイチモツをこねくり回すのはやめんか」

「え？はっ！す、すみません…っ、つい…」

そして着物の狸さんに蹴っ飛ばされる。
相変わらず変態だな。

一方、『おとら狐』は（まだ）『犬神』と激しい戦いを繰り広げていた。

異界の力の差がない妖怪同士の戦いでは互いに相手を恐れさせることがなかなかできないため、容易に決着がつかないのである。

「はーはーはー…なかなかやるな狐よ。その場しのぎの依り代『野衾』でここまで戦えるとは」

「ふーふーふー…あなたもとてもおやりになる。それだけ依り代の力をうまく引き出しているということですか」

「面白い戦いだ（読者どもに見せられなかったのが残念だ）が、もうこれ以上やる必要もあるまい。私の今回の任務はお前の足止めだからな。御玉猫ほどの力があれば、もうお前の仲間は無事ではあるまい」

「…そうですね。それを理由に逃げるおつもりなのでは？」

「…俺はな、恨めば恨むほど力が増し強く戦える妖怪なんだ。残念ながらお前には何の恨みも無いし、生じない。これ以上やってもお互いに無意味に力を削るだけだ。それに、妖怪の世界を創り上げようというのに妖怪同士で潰し合ってどうする？ただでさえ数が少なくなっているというのに」

「そうですね。あなたの考え方は理解りました。しかし時代の流れというものがあるでしょう。今が昔の様に、妖怪が繁栄できる時代に向かっているとは到底思えないのですが」

「それはどうかな？平和主義もいいが、型の中にいつまでも納まっているようでは何も変わらんぞ」

「そうですね。昔の様にはいなくなるとも、少しでも勢力を拡大せねばなりません。妖怪を絶やさないためにも」

ふと何かの気配が紛れ込んだかと思えば、間もなくして背後から美しい着物姿の女性が現れた。

「…誰ですかあなたは」

「『血桜』と申します。妖怪の世界を取り戻すことを夢見ている一人ですわ」

「あなたも『犬神』や『化怪猫』と同じ思想をお持ちなのですか」

『おとら狐』は、『血桜』の強い異界の力を感じながらも冷静に質問した。

「基本的には同じです。しかし『化怪猫御玉』がどこまで先を見据えているのは、まだわかりません。『犬神』と私はあの猫殿を見極めるために遣わされたのです」

「つ、遣わされたと？ 一体お前たちの上には何がいるのだ？」

「それはお教えできません。…そろそろ私たちも猫殿のもとに行かねばなりません。是非あなたにも、この『革命』にご参加いただきたくてお目にかかったのですが、無駄でしたわね。さあ『犬神』、参りましょう」

「そうだな」

『血桜』の姿は一瞬にして蛇と化し、空中に浮かび始めた。

『犬神』は大事な依り代を捨てることはできず飛べないため、『血桜』の尻尾につかまった。

「ま、待ちなさい！」

「香月、万夫、裂、颯、この狐を取り押さえなさい！」

『血桜』がそう叫ぶと、どこからともなく4匹の獣が現れて、『お

とら狐』に飛びかかってきた。

「うっ？！何だこいつらは…『管狐』か？」

『管狐』らしき獣の一匹が、鋭い体毛を風に乗せて飛ばしてきた。しかし霊体である『おとら狐』に効果があるはずもない。

また別の一匹が力を吸い取るために噛み付こうとしたが、『おとら狐』が異界の力を解放すると、あっけなく吹き飛ばされてしまった。それを見た他の3匹も、尻尾を巻いて逃げていった。

「残念、逃げられたか…。『犬神』と『血桜』…一体彼らは誰に付き従っているのだろう…。『化怪猫』とは別にこの世界を狙っている妖怪がいるのか…」

「…何者だお前たちは」

b y 御玉猫。

「ワシは佐渡の団三郎だんさいさうという狸だ。そしてこいつは鹿児島出身の河

童で『ガラツパ』。ほんでこっちのほうは北海道の河童で『ミンツチ』だ」

…説明しよう。

団三郎を中心に、右に『ガラツパ』、左に『ミンツチ』、そして団三郎の股間に『シタガラゴンボコ』がいるという構図である。

「狸殿と河童殿が、私に一体何の用か？」

「いや、あるところで猫さんが暴れていると聞いてな。どれほどの力をお持ちなのか、見てみたくなっただよ」

団三郎は落ち着いた口調で言った。

河童たちもそれに続く。

「私たちもあなたの能力に興味があつてね。是非お手合わせ願いたいところだが」

「団三郎さんがどうしても私が戦いたいというので、まあ、我々はオブザーバーとして来たわけです」

この妖怪達からは化怪猫に対する恐怖が微塵も感じられない。むしろそれを見ている化怪猫の方が、少したじろいでいるようだった。

さっきまで余裕かましてうるさかった『覚』も、まるで人形のように

に静かに立ち尽くしていた。

そして『火を貸せ』も『狂骨』も『ふらり火』も詩季美も、彼らの力の大きさを感じ取ったのだろう。誰も一言も発することができない。

「それはそれは。わざわざ来てもらって悪かったな。こちらとしても、お前の力には興味が、まあ無いでもない。それに、私が支配者になるには早いという言葉の意味も気になるしな」

明らかに化怪猫御玉は虚勢を張っている。わかっているのだ。

団三郎の力がどんでもないということ。

「ははは、それはそのままの意味ですぞ。今のあなたの力では、支配者になどなれない」

「なるほど。私も、そうたやすく人間妖怪の長になれるとは思っていない。だからこそ少しずつ力を蓄えてきたのだ。そして今、そこにいる高い霊力を持った人間を喰らうことで、その力が完成するのだ」

「他人の力…しかも弱い人間の力を奪ってのし上がるか。あまり感心しませんな。それがあなたの妖怪としての存在意義である以上否定はしませんがね。では、ワシはそれを阻止してみることにしよう。どうですか、御玉猫さん？」

「…望むところだ」

こうして、主人公ほったらかしで猫VS狸の戦いが始まるうとしていた。

化怪猫 - 3 -

12 .

「…はっ！」

化怪猫御玉は狭めていた異界を再び開放した。

次第に人間界との境界にひずみが生じそれが強まって、例の猫足スタンプとなって団三郎狸に襲いかかる。

「ほう、境壁を強めることができるか。ならば…ほ…！」

掛け声と同時に、団三郎も境壁を繰り出した。

彼の壁の様子は三十丸とかなりシンプルなものであったが、猫足スタンプをすごい力でぐいぐいと押し戻していく。

「ほらほら猫さん、こんなものかい？」

「く…！」

何ということだ。

あの御玉猫が一方的に圧されているではないか…。

「…やつ！」

「ん？」

「喰らえ！『玉燐火』！」

ぎょくりんか

猫足スタンプが次第に青白い球体に変わり、それが無数の火の玉と
なって弾けた。

そしてそれらが三十丸に向かって降り注ぎ、吹き飛ばした。

「ほう、いや、なかなかやりますな。その調子です。では、張り切
っていきましょう！」

「はーはー…ぜーぜー…だめだ…力が…力が足りない…」

猫は肩で息をしている。

しかし狸はピンピン、むしろどんどん元気になってませんかポンポ
コリン。

「力…ちからが…」

「ほっほっほ。力不足だということは、先ほどから申し上げておる
でしょー」

「ちから…ちからあああああ…！…！…！…！…！…！」

突然御玉猫が発狂したように（てか、してる）叫びながら、こちらに向かって飛んできた。

「うわ！や、やば！真実、危ない！」

詩季美が僕の前に立ちふさがった。

し、詩季美…や、やめる…！！

…とその時、詩季美の前に黒い影が現れた。

河童…ミンツチの方だ。

「どけい…！」

「こら。お前の相手はこの人間ではないぞ。さっさとこの場所に戻れ」

そう言いながら『ミンツチ』は手を猫に向かってかざした。

すると菱形の模様が浮かび上がり、それが猫を一瞬のうちに吹き飛ばしてしまった。

「あがッ！…そ…そんな…私の力は貴様にも及ばないのか…」

「ふ…恐れているな。だがその恐れはたった今生じたものではないだろう。団三郎殿と戦っている時、いや、戦う前に顔を合わせた時から、お前は恐れに支配されていた。お前の敗北は、その時からす

でに決まっていたのだ」

「…」

団三郎・ミンツチの異界に飲み込まれ、我を忘れたように空を見上げる化怪猫御玉。

そんな猫に、団三郎狸は穏やかに話しかけた。

「猫さん。あなたはあと一人の人間の霊力を奪うことで力が完成すると言ったが、ワシはそうは思わんがね。あなたは妖怪になってからまだ100年ちよつとしか生きてない。まだまだこれからだと思っよ」

「ふ…ふふ…。そんな言葉は何の慰めにもならない。今思えば、こんな半端な力で、妖怪が支配する世界を築き、その上に立とうなどと、よくもまあ大それたことを考えたものだ」

「…た、玉さん？」

隠れて見ていた『覚』が心配そうに問いかける。

「ここで…ここであきらめてはなりません。世の中にはびこる人間を淘汰し、妖怪の世界を創りましょう！」

「『覚』…もうよい…もうよいのだ」

「…そうかよ。残念だな。ならば消える」

『覚』の口調が一変し、周りの空気が黒く染まっていく。

「ぐ…あ…」

『覚』は一瞬にして猫の背後に移動し、自ら発生させた黒い刀で猫の体を貫いた。

美貌が徐々に崩れ、古猫の姿に戻っていく。

「…まったく、期待外れもいいところだ。これくらいのことでは志を失うようでは、確かに団三郎、貴様の言うとおり、支配者になどなれるはずがない。せつかくの仲間だったのに、惜しいことをしたなあ」

「『覚』…貴様…！」

『ガラッパ』は怒りに打ち震えている。

「まあそうかつかなさるなよ。もとはといえば、これは猫が始めたことなんだからな」

「何だと？」

黒いオーラを放ったまま、『覚』は話を続けた。

「俺は300年ほど前から、この心を読む能力を駆使して、妖怪の支配する世界を取り戻すこと望んでいる、あるいは自らがこの世界を治めようという野心を持った妖怪を集めていたんだ。その中でも御玉猫はひととき強い志を持ち、また人間を嫌っていた。態度も尊大だったしな。まだまだ成長途中ではあったが、こいつは妖怪の長になれるんじゃないかと思ったのよ。だから俺はこの化怪猫の人間集めに協力し、ここまでいっしょにやってきたのさ。こいつが『力の完成』を果たし、再び妖怪の世界を創り上げるといふ革命のためにどう動くかが見ものだったんだが、邪魔されちゃったな」

「『覚』よ。確かにワシらはお前たちの邪魔をした。いまさら妖怪中心の世界を創ろうということに賛成などせんからな。だが猫を消したのはお前だ。お前は自ら『革命』の指導者となりうる存在を消したのだぞ」

「団三郎さんよ。こいつは貴様に打ちのめされて心が折れてしまった。そんなやつが仲間についても足手まといになるだけだ…まあ、今ここで俺が猫のカタキを討ったところで世の中が変わるわけでもない。ここはひとまず退散することにしよう。よう、その人間、命拾いしたな。じゃ、また会う日まで」

『覚』は化怪猫の骸を放り投げると、それに黒いオーラをぶつけて破壊した。

「香月、カモーン！」

ヤツが遠くに向かつて叫ぶと、細長い獣が風に乗って飛んできた。詩季美が思わず叫んだ。

「あ、あいつはだいぶ前に真実にとり憑いた…『管狐』！」

ああ、詩季美と初めて出会ったその夜に襲ってきたやつか。

僕はあの時、背後に気配を感じた途端に憑かれて気を失ったので、その姿を見ていないのだ。

それにしても、あの妖怪は『覚』の回し者だったのか。

えらい前から目を付けられていたのね、自分。

『覚』は『管狐』の背中に飛び乗ると、猛烈なスピードで飛び去っていった。

「…みんな…追わなくていいのかよ…」

『狂骨』が、誰も動かないこの状況に苛立っているようだ。それを聞いた『団三郎狸』が、それを諭すように言った。

「追っても仕方あるまい。あやつが言っておった仲間とやらがどんな妖怪なのか、またどれくらいいるのかも見当がついていない以上、深追いするよりくなことになるまい。さてワシらもいったん帰るところにしよう」

「今回は本当にありがとうございました」

僕は精一杯の感謝をこめて、妖怪一同に向かって頭を下げた。
非力な自分がとても許せなかった。

「いいのだよ。ワシも久々に暴れさせてもらった。佐渡ではこうい
った刺激は得られないからね」

「われわれ河童も、たまには外に出ないと体がなまってしまつので、
いい運動になりました」

「運動もいいが、皿の中の水だけは切らすなよ」

「大丈夫です。補給用の水は常に用意してあります」

『狂骨』が笑いながら言った。

それに対して『ガラツパ』が懐から水の入ったペットボトルを取り
出してみせる。

まったく、なんて愉快なやつらなんだ。

『団三郎狸』一向が帰っていった直後に『おとら狐』が戻ってき
た。

『覚』の仲間の『犬神』という妖怪と戦ったが、逃げられたらしい。

『野衾』は…置いていかれたらしい。

「化怪猫の力を見極めにいくとか言っていました。必死にその気配
をたどってみると、あなた方と化怪猫がいるところとは全く違う方

角に向かっていったようなので、できる限り追いかけてはみたんですが、ダメでした。やはり徐々に消えゆく残留気配を頼りに追うことはなかなか一人ではできませんね」

『おとら狐』の話を聞いていると、一つだけショックなことがあった。

僕と詩季美とその後輩に綺麗な桜の花を見せてくれた、あの『血桜』が『犬神』と『覚』、そして化怪猫御玉の仲間であったということだ。

彼らは計画をあきらめたわけではないだろうから、またいつか攻めてくるに違いない。

その時に備えて体を鍛えようか…うーん、やっぱり人間じゃ妖怪には敵わないかなあ…。

…。

「どうしたの真実？」

「詩季美…僕は今回守られっぱなしだったわけだけど、やっぱり自分の身は自分で守らなきゃなと思ってな…」

「真実、一つだけ方法があるわ。それはね、心を強くすることよ。できるだけたくさん妖怪に出会って、肝っ魂を強くするの。相手の異界に飲み込まれない精神を身に付けて…って、妖怪マニアのあんたなら、もう知っていることか」

「いや、僕は妖怪のことを知っているようで、本当はぜんぜん知らない。一から…勉強し直すことにするよ。それと、お前が言うように、もっとたくさん妖怪に出会って、肝魂を強くしよう」

「あたしも手伝つよ。ボディガードとしてね」

「…ありがとう」

ありがとう。

君に出会えて本当に良かったよ。
それと、みんなにもな。

「おーい、みんな！」

「何だー真実？」

「どうしたのだ？」

「どうかしましたか？」

「どうした？」

『狂骨』が明るく返事をする。

『火を貸せ』は、相変わらず冷めている。

『おとら狐』はいつもどおり穏やかだ。

『ふらり火』は見た目以上に声が渋い。

『シタガラゴンボコ』は人の股間ばかり触っていて聞いていない…蹴

「えー…自分の家に招待する！と言っておきながら、まだそれが実

行われていないことに今気付きました。今日一日のお礼も兼ねまして、盛大にオモテナシをしたいと思います!!」

すねこすり

これは詩季美^{しきみ}がまだ幽霊になる前、女子中学生だった時の出来事である。

ある雨の日、中学生の少女は急ぎ足で坂道を上っていた。

現在の午前9時過ぎ。

完全なる遅刻である。

何故こうなったのか。

いろいろあって、寝坊したらしい。

先生に理由を聞かれて、そう言うつもりだろうか。

彼女の家から学校までの距離は約1キロほどだが、行きには大きな上り坂が一つあるため、歩くと思いのほか時間がかかる。

心臓破り、とまではいかないが、彼女のような弱き乙女にはまるで立ちはだかる壁の如し。

本人曰く、「か弱い」が彼女のキーワードらしい。

…で、か弱き（ここ重要）少女は今、必死に坂を上っている。

何でこんなところに坂なんかあるのよ馬鹿アホ少しは考えなさいよ、とか何とかブツクサ言いながら。

坂に文句を言っても仕方がないが、こういう時に限って雨というのは、確かにやり場の無い苛立ちを覚える。

しかも降るな降るなと思えば思うほど雨足が強くなるのだから堪らない。

「雨の、バカヤローッ！…って、おわっ！」

彼女は、不意に足元に何かがぶつかつたような感覚を覚え、危うく転びそうになつた。

しかし辺りを見渡してみても、変わったところは無かつた。気のせいか。

彼女はそう思つて、再び急ぎ足で歩き出した。

イライラしているから注意力が散漫になるんだ。

だからゆっくり、慎重に……って、そんなことしてたらもっと遅刻するっちゅーの!!!!!!

やっぱり急がなきゃ。

「シュツ！」

またしても、か弱き（ここ大変重要）少女は足元に何かが掠るような気がした。

と思いきや。

ふと横を見ると、見たこともないような動物が、雨の中に腰を下して彼女を見ていた。

「なーんだ、あいつは……んん？」

猫……にも鼯にも見える、クリーム色の動物。

何気に可愛い。

しかしその動物は少女が近づこうとするや否や、あり得ないスピードで走り去ってしまった。

これはすねこすりという、道の妖怪の一種である。

特別恐ろしい妖怪ではなさそうだが、出会ったのが夜道だったりすると、結構怖い。

慌てて走っていたりする時に出るといっ。

…え？そんなことよりか弱き）　ここ超重要。テストに出るぞ）乙女は結局どうなったって？

遅刻だよ遅刻。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3461t/>

化怪-BA . KE-

2011年10月9日02時21分発行